



Middle Years Programme
Programme d'éducation intermédiaire
Programa de los Años Intermedios

中等教育プログラム（MYP）

プロジェクトガイド

2014年9月／2015年1月から適用



International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional



Middle Years Programme
Programme d'éducation intermédiaire
Programa de los Años Intermedios

中等教育プログラム（MYP）

プロジェクトガイド

2014年9月／2015年1月から適用



International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

中等教育プログラム

プロジェクトガイド

2014年5月発行、2014年9月／2015年2月改訂の英文原本 *Projects guide* の日本語版
2016年1月発行

本資料の翻訳・刊行にあたり、
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

注： 本資料に記載されている内容は、英文原本の発行時の情報に基づいています。

非営利教育財団 国際バカロレア機構
(International Baccalaureate Organization)
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト：www.ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2016

国際バカロレア機構（以下、「IB」という。）は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくはwww.ibo.org/copyrightをご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール：sales@ibo.org

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、
International Baccalaureate Organization の登録商標です。

IBの使命

IB mission statement

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。

目次

はじめに	1
本ガイドの目的	1
MYPプロジェクト	3
プログラムモデル	3
MYPプロジェクトの学習	5
IBの一貫教育を通して完結する経験	6
ねらい	8
目標	9
MYPプロジェクトの計画	12
要件	12
スタッフの役割	13
MYPプロジェクトに必要な時間	16
MYPプロジェクトで使用する言語	17
学問的誠実性	18
MYPプロジェクトの指導	19
MYPプロジェクトにおける探究	19
MYPプロジェクトにおける「行動」	20
グローバルな文脈	24
学習の方法	26
プロセスジャーナル	28
リソース	31
MYPコミュニティープロジェクトの完成	32
コミュニティープロジェクトの目標	32
コミュニティープロジェクトの調査と計画	34
コミュニティープロジェクトの発表	40
評価規準の使用	42
コミュニティープロジェクトの評価規準：第3年次または第4年次	43

MY P パーソナルプロジェクトの完成	47
パーソナルプロジェクトの目標	47
パーソナルプロジェクトの調査と計画	49
パーソナルプロジェクトのレポート作成	54
評価規準の使用	57
パーソナルプロジェクトの評価規準：第5年次	58
パーソナルプロジェクトのモデレーション	62
 付録	 63
MY P プロジェクトの学問的誠実性宣誓書	63
MY P パーソナルプロジェクトのカバーシート	65
MY P プロジェクトの用語	66
MY P プロジェクトの指示用語	67
参考文献	68

本ガイドの目的

本ガイドは、学校年度の開始時期に合わせて、2014年9月または2015年1月からの運用となります。

本ガイドは、中等教育プログラム（MYP）で実施される「コミュニティープロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」の枠組みを提供します。必ずIB資料『MYP：原則から実践へ』（2016年1月刊行）も併せて読み、活用してください。『MYP：原則から実践へ』には次の内容が含まれています。

- ・ プログラムの概要
- ・ 「学習の方法」（approaches to learning）の詳細
- ・ 生徒のアクセスと「インクルーシブ」な教育（学習支援の必要な生徒のための宿泊設備を含む）をサポートするためのアドバイス
- ・ 学問的誠実性についての方針

MYPの資料では、要件はどのように枠で囲んで表示されます。

その他のリソース

教師用参考資料（TSM: teacher support materials）が、オンラインカリキュラムセンター（OCC）に用意されています（<http://occ.ibo.org>）。MYPプロジェクトのための教師用参考資料には、「MYPプロジェクト」の計画、準備、実施を支援する内容が掲載されています。指導教員と生徒のための情報や予定表、指導教員のコメントがついた生徒の学習成果物など、優れた実践例を見ることができます。

同じくオンラインカリキュラムセンターに用意された年1回刊行のIB資料（英語版）『*Handbook of procedures for the Middle Years Programme*（MYP手順ハンドブック）』には、「MYPパーソナルプロジェクト」に必須のモデレーション（評価の適正化）プロセスについての情報が掲載されています。

また、MYPを支援するさまざまな資料をIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入できます。

謝辞

I Bと共に中等教育プログラム（MYP）の発展に取り組む、I Bワールドスクール（I B認定校）と世界中の教育者コミュニティの多大なる貢献に、深く感謝いたします。

プログラムモデル

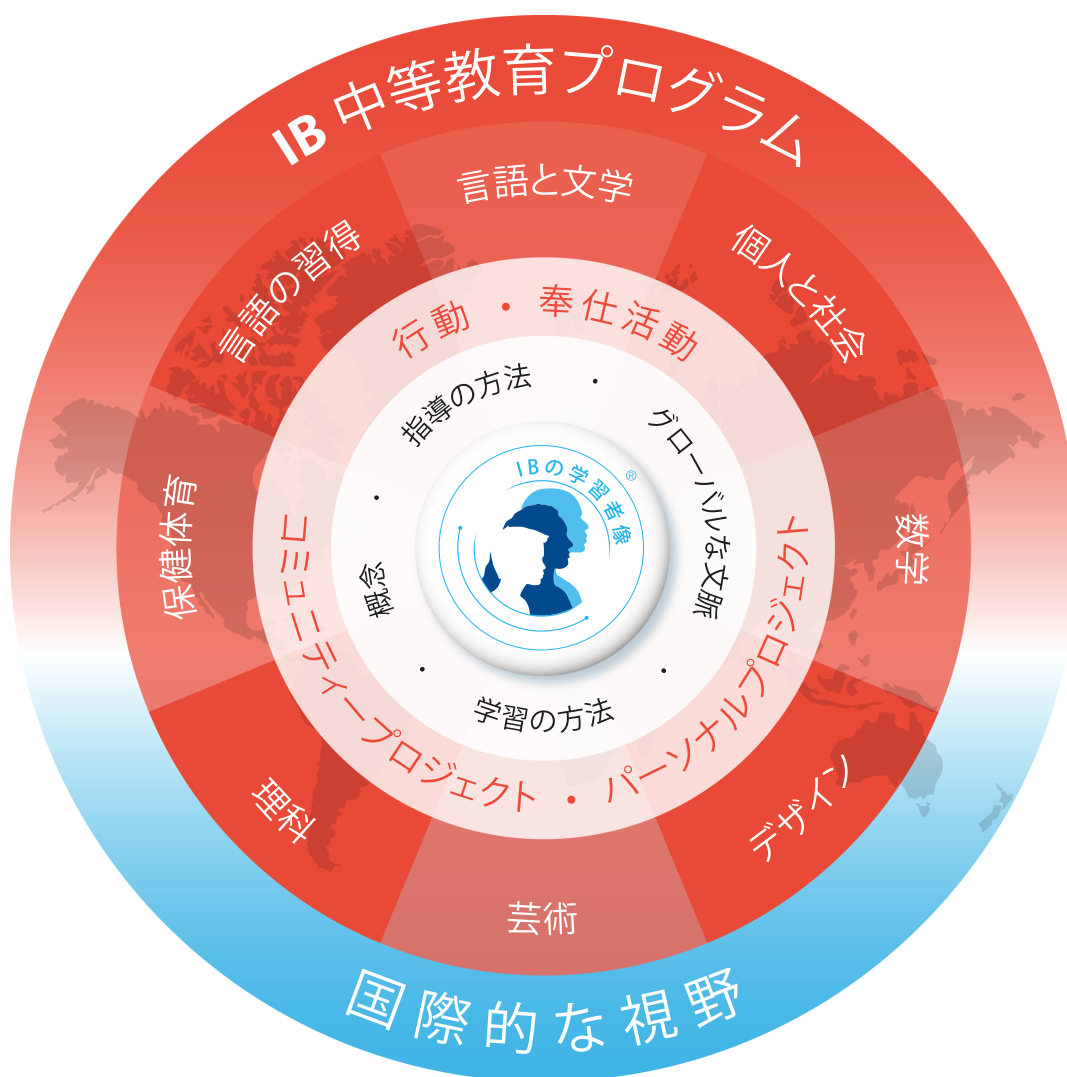


図1

中等教育プログラム（MYP）のモデル

MYPは11歳から16歳までの生徒を対象としたプログラムで、生徒が創造的、批判的、^{クリティカル}内省的思考を身につけることを促す学習の枠組みを提供します。MYPでは知的な課題を重視し、各科目の学習内容と実際の社会を結びつけるよう生徒に働きかけます。これにより、コミュニケーションや多様な文化の理解、グローバルな関わりのためのスキル、つまりグローバルリーダーとなる若者に欠かせない要素を育成します。

MY Pには、ほとんどの国や地域で定められたカリキュラムの要求に十分に対応できる柔軟性があります。IB初等教育プログラム（PYP）で身につけた知識、スキル、姿勢を活かし、IBディプロマプログラム（DP）やキャリア関連プログラム（CP）の厳しい勉強に対応できるよう生徒を導きます。

MY Pでは、以下のような取り組みを行います。

- ・ 生徒の知的、社会的、情緒的、身体的な**発達**に、^{ホリスティック}全人的に取り組む。
- ・ 生徒が複雑な問題に対応し、未来に向けた責任ある行動をとるために必要な、**知識、姿勢、スキル**を育む機会を与える。
- ・ **8つの教科**を通して、幅広く深い理解が得られることを保証する。
- ・ 生徒が自国の文化と他国の文化を理解できるよう、**2つ以上**の言語の学習を義務づける。
- ・ 生徒に、**コミュニティの奉仕活動**に参加できる力を身につけさせる。
- ・ **進学や就職、生涯にわたる学習**に取り組めるよう生徒を導く。

MYPプロジェクトの学習

第3、4、5年次を含むMYPプログラムを提供する学校では、生徒に「コミュニティープロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」の**両方**を行う機会を与えるという選択もできます。この「コミュニティープロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」を総称して、「MYPプロジェクト」と呼びます。

「コミュニティープロジェクト」は、コミュニティーと奉仕活動に焦点を合わせ、生徒がコミュニティーで「行動」としての奉仕活動を実践する権利と責任を探究するよう促します。この「コミュニティープロジェクト」で、生徒はさまざまなコミュニティーのニーズに対する意識を高め、サービスマーケティング（奉仕活動を通じた学習）を通してそれらのニーズに対応する機会を得ます。学習したことを定着させるため、「コミュニティープロジェクト」では「行動」としての奉仕活動につながる、長期間にわたる掘り下げた探究を行います。「コミュニティープロジェクト」は、ひとりで、または3人までのグループで行います。

「パーソナルプロジェクト」は、生徒が既習事項と科目固有の学習を統合し、興味のある分野を掘り下げられるよう、「学習の方法」（ATL）のスキルを磨くことを促します。生徒は自発的な取り組みによって作品や成果を生み出し、創造性を発揮し、MYPにおける学習の総括を示す、またとない機会を得ます。このプロジェクトは、生徒それぞれのニーズに応じて、異なる学習方法や表現の機会を数多く提供します。このプロジェクトは「^{パーソナル}個人的」な性質が重要です。それぞれの生徒を刺激し興味をを起こさせる課題を中心に展開します。生徒はひとりで「パーソナルプロジェクト」を行います。

「MYPプロジェクト」は学習者を中心として、年齢に応じた形で行われ、生徒は「探究」、「行動」、「振り返り」のサイクルを通して実践的な探究に携わることができます。「MYPプロジェクト」は、生徒が「IBの学習者像」に近づくことを助け、MYPを通して育んだATLスキルを発揮する重要な機会を提供し、生涯にわたり自主的に学ぶ姿勢を育みます。

I Bの一貫教育を通して完結する経験

I Bの国際的な一貫教育は、3歳から19歳までの幼児および児童生徒に継続的な学習を提供します。図2は、I Bの一貫教育で4つのプログラムを通して行うプロジェクトや集大成となる経験の流れを表しています。

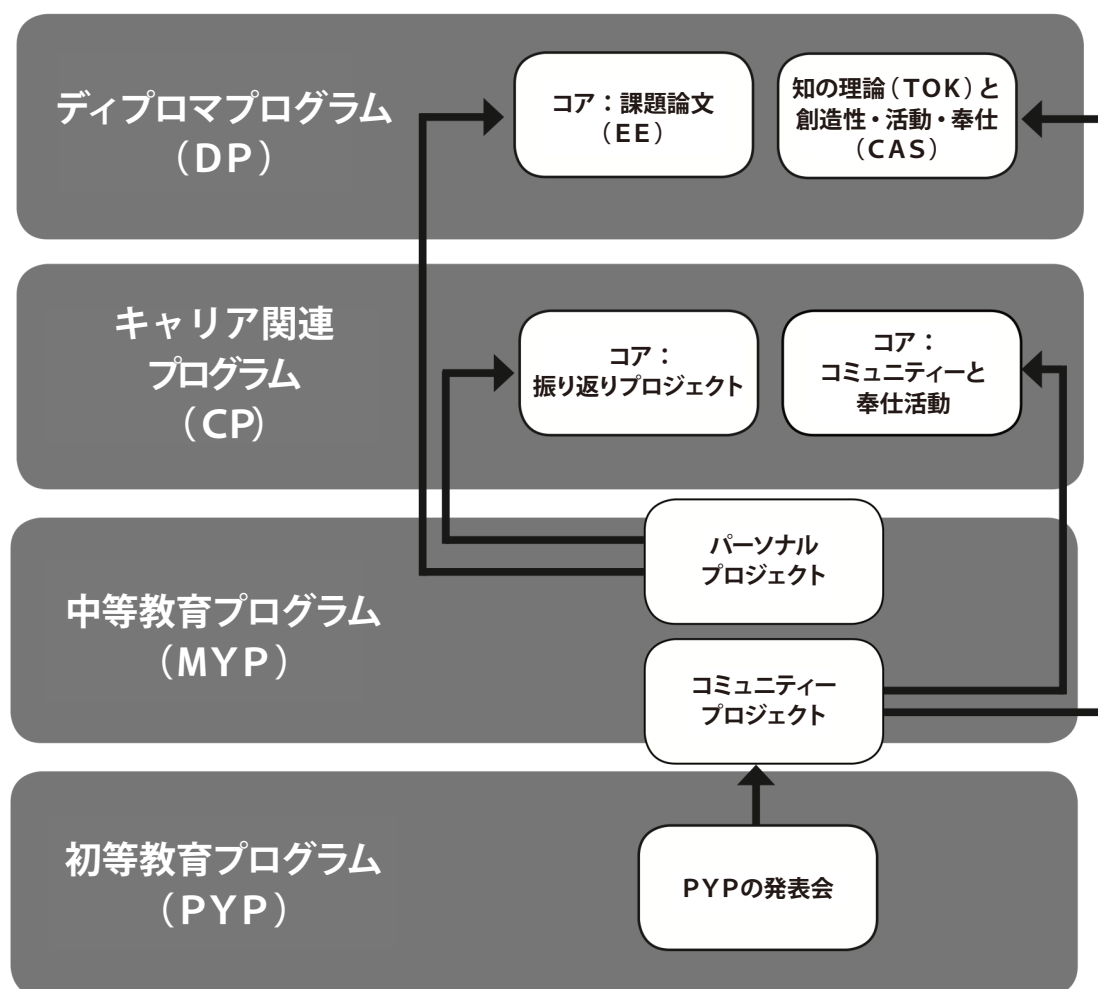


図2

I Bのプロジェクトにおける一貫教育の流れ

PYPで学ぶ生徒は、それまでに体験した意欲を喚起する幅広いカリキュラムの集大成を、PYPの「発表会^{エキシビション}」で発表します。ここでは、生徒を取り巻く世界の探究を含む学習の成果が、年齢に応じた形で発表されます。

「MYPプロジェクト」は、生徒がCPやDPといったこの先の教育で行うプロジェクトや発表の準備にもなります。「MYPプロジェクト」と、たとえばDP科目のひとつ「グローバル政治」における「エンゲージメント・アクティビティー」のような、DPの科目固有の評価には、課題の性質とレポートの発表形式において強いつながりがあります。しかし、何よりも「MYPプロジェクト」と直接関係しているのは、CPとDPの「コア」です。

CPの「コア」は、「学習の方法」、「^{リフレクティブ}振り返りプロジェクト」、「言語能力の発達」、「コミュニティと奉仕活動」で構成されています。「MYPコミュニティプロジェクト」は、コミュニティのニーズに対する意識啓発、ATLスキルの応用、プロジェクトの展開に伴って探究の振り返りができること、そして活動の集大成となる口頭での発表のための言語能力の育成を支援します。

DPの「コア」は、「課題論文」、「知の理論」(TOK)、「創造性・活動・奉仕」(CAS)で構成されています。CASで「奉仕」が重視される点と「知の理論」の発表形式は、どちらも「MYPコミュニティプロジェクト」における「行動」としての奉仕活動と発表によく似ています。

生徒は、「MYPパーソナルプロジェクト」で自分が興味をもっていることを掘り下げ、DPの「課題論文」(EE)で研究論文を通して学術的な興味を掘り下げることができます。「パーソナルプロジェクト」は研究論文でなくても構いませんが、必ず情報を活用し出典を明らかにした研究を行います。

「コミュニティプロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」では体験的な学習を重視し、CPおよびDPの「コミュニティと奉仕活動」では、これをさらに掘り下げます。生徒は「MYPプロジェクト」を通して、長い時間をかけて意義のある学習成果物を生み出す責任や、学習や課題の成果を振り返る必要性を体験します。こうした体験は、生徒を今後の学習、仕事、生活の場での成功に導く重要なスキルとなるものです。

ねらい

「ねらい」とは、生徒が何を体験し学ぶことができるかを述べたものです。「ねらい」は、学習経験によって生徒がどのように変化できるかを示唆しています。

「MYPプロジェクト」のねらいは、次のような生徒の行動を奨励し支援することです。

- ・ グローバルな文脈で、継続的で、自発的な探究を行う。
- ・ 掘り下げた研究を通して、新たに創造的な洞察力を生み出し、理解を深める。
- ・ 長期間にわたってプロジェクトを行うために必要なスキル、姿勢、知識を示す。
- ・ さまざまな状況において効果的にコミュニケーションをとる。
- ・ 学習を通じて、または学習の結果として、責任ある行動を示す。
- ・ 学習プロセスを正しく理解し、成果に誇りをもつ。

目標

「目標」は、学習のために設定された具体的な達成内容を述べたものです。生徒が学習の成果として何をすることができるかを定義しています。

MYPプロジェクトの目標

「MYPプロジェクト」の目標には、知識についての事実、概念、手順、メタ認知に関する側面が含まれます。表1は、「コミュニティープロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」それぞれに固有の目標と、重複する目標を示しています。

コミュニティープロジェクトの目標	パーソナルプロジェクトの目標
目標A：調査	
i. 個人的な興味に基づき、コミュニティー内のニーズに対応するための目標を設定する	i. 個人的な興味に基づき、プロジェクトの明確な目標とグローバルな文脈を定義する
ii. プロジェクトと関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認する	
iii. リサーチスキルを示す	
目標B：計画	
i. コミュニティーのニーズに取り組むための行動案を作成する	i. 作品や成果の評価規準を定める
ii. プロジェクトの進行過程を計画し記録する	
iii. 自己管理スキルを示す	
目標C：行動	
i. プロジェクトの成果として、「行動」としての奉仕活動を行う	i. 目標、グローバルな文脈、評価規準に応じて、作品や成果を生み出す
ii. 思考スキルを示す	
iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを示す	

コミュニティープロジェクトの目標	パーソナルプロジェクトの目標
目標D：振り返り	
i. 行動案に照らし合わせて「行動」としての奉仕活動の質を評価する ii. プロジェクトの完了により、サービスマーケティングについての知識と理解がどのように深まったかを振り返る iii. ATLスキルの上達を振り返る	i. 自分の評価規準に照らし合わせて、作品や成果の質を評価する ii. プロジェクトの完了により、トピックやグローバルな文脈についての知識と理解がどのように深まったかを振り返る iii. プロジェクトを通してのIBの学習者としての成長を振り返る

表1
MYPプロジェクトの目標

生徒にとって、「コミュニティープロジェクト」の発表や「パーソナルプロジェクト」のレポートは、自分の目標にどのように取り組んだかを示す機会となります。生徒は、わかりやすく、正確で、適切なコミュニケーションを行うことが期待されます。

プロジェクト目標の可視化

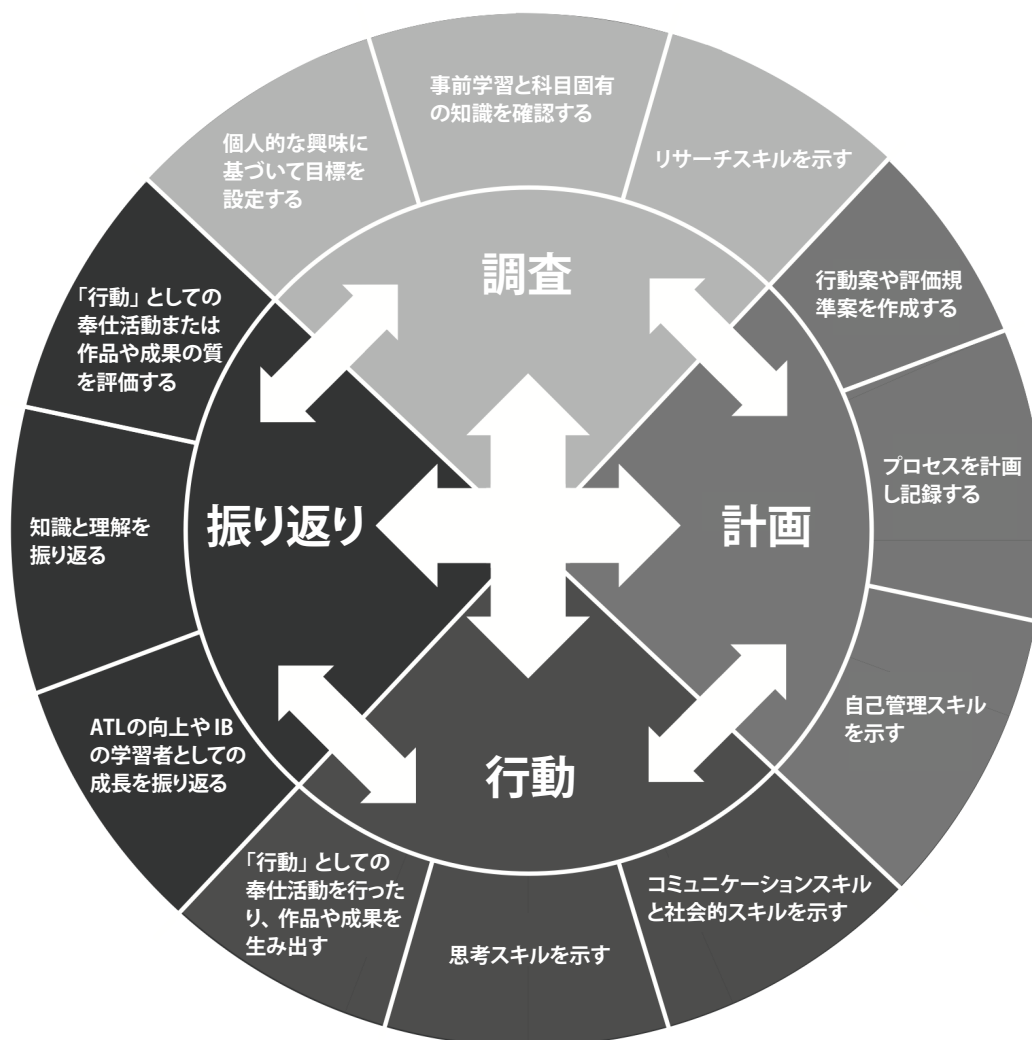


図3

プロジェクト目標の可視化

図3は、「コミュニティープロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」の4つの目標である「調査」、「計画」、「行動」、「振り返り」が循環的で相互に作用し合う探究への取り組みを形づくることを示しています。これが探究への取り組み方です。4つの目標は、プロジェクトの制作過程、作品、レポートまたは発表において、まんべんなく表現されます。

要件

MY Pをプログラムの第3年次または第4年次で修了する学校では、すべての生徒が最終学年で「コミュニティープロジェクト」を完成させること。生徒は「コミュニティープロジェクト」に約15時間を費やすことが期待される。

「コミュニティープロジェクト」は、ひとりで、または3人までのグループで行うことができます。

MY Pをプログラムの第5年次で修了する学校では、すべての生徒が「パーソナルプロジェクト」を完成させ、その大部分はMY Pの最終学年で取り組むこと。生徒は「パーソナルプロジェクト」に約25時間を費やすことが期待される。

学校は、MY Pの第5年次の生徒全員を、「パーソナルプロジェクト」の外部モデレーション（評価の適正化）のために登録すること。

「パーソナルプロジェクト」をまずまずのレベルで完成させた生徒は、IBのMY Pでの成績を受け取る資格があります。「パーソナルプロジェクト」の適切な完成は、MY P修了証を得るための必須条件です。

第3年次と第5年次の両方を含むMY Pを実施している学校は、「コミュニティープロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」の両方を行う機会を生徒に与えることもできます。

学校は次を保証すること。

- ・「コミュニティープロジェクト」および「パーソナルプロジェクト」を、いかなる教科カリキュラムの一部ともしない。ただし、個々の科目はプロジェクトを完成させる助けとして機能することができる。
- ・プロジェクトのすべての指導教員が本ガイドを熟知し、自らの役割と責任を理解する。
- ・指導教員は本ガイドが示す評価規準に従ってプロジェクトを評価し、校内で標準化を行う。

これに加えて、MY Pを実施する学校では、次のことが役立つでしょう。

- ・プロジェクトの要件と目標を、保護者や学校外部の地域の専門家に伝える。
- ・図書司書や特別支援学級の教員などをプロジェクトに参加させる。
- ・スクールカウンセラーや指導者^{メンター}をファシリテーターとして参加させて、生徒の学習上のニーズや精神的ニーズを支援し、プロジェクトの進行を円滑にする。
- ・発表会を開いて、生徒がプロジェクトをクラスメート、教師、保護者に見せる機会を提供する。

スタッフの役割

学校は、「MYPプロジェクト」を指導監督するスタッフの役割と責任を定義した仕組みを提供する必要があります。

学校は、MYPプロジェクトの指導監督と調整を行うためのリソースを必ず割り当てること。

プロジェクトコーディネーターの役割

IBは、学校内でのプロジェクトの実施、計画、管理を行うプロジェクトコーディネーターを、学校内に1名以上任命することを奨励します。プロジェクトコーディネーターの人数は、学校の規模と、「コミュニティープロジェクト」または「パーソナルプロジェクト」（学校の形態や運営によってはその両方）に関わる生徒の人数により異なります。MYPコーディネーターが「MYPプロジェクト」について責任を負う学校では、多くの場合コーディネーターへの時間配分を増やす必要があります。または、その代わりにコーディネーターの役割をほかのスタッフに割り当てるという選択肢もあります。

プロジェクトコーディネーターは、MYPコーディネーターや学校管理職チームからの支援と協力を得て、指導教員と生徒がプロジェクトを無事に完成させるために必要なシステムをつくる責任を負います。

指導教員の役割

指導教員の役割は、プロジェクトの実施中に生徒や生徒のグループを支援することです。「コミュニティープロジェクト」では、グループの状況を変更する必要がある場合に、指導教員は最良の判断を下すことが大切です。

コミュニティープロジェクト	パーソナルプロジェクト
生徒ごと、または共同でプロジェクトを行うグループごとに、指導教員がつく。	生徒ごとに指導教員がつく。

表2
指導教員の割り当て

学校がプロジェクトの指導監督のために定めるシステムも、学校の規模や「MYPプロジェクト」に参加する生徒数によって変わります。生徒が十分な指導監督を受けられるよう、学校はすべての教師と専門スタッフをプロジェクトの監督に参加させるという選択もできます。過剰な負担を避けるため、DPの「課題論文」やCPの「^{リフレクティブ}振り返りプロジェクト」の監督など、スタッフが抱えるその他の責務を考慮に入れる必要があります。

学校は、さまざまな方法で指導教員の割り当てを決めます。次はその例です。

- ・ 生徒が、担当してほしい指導教員を選んで申し入れる
- ・ 指導教員が、生徒のプロジェクト案のリストを見て選ぶ
- ・ 学校が、無作為に、または必要なスケジュールに応じて生徒に指導教員を割り当てる

指導教員の責任
・ 生徒の選択したMYPプロジェクトのトピックが、安全衛生、機密保持、人権、動物保護、環境問題に関して、法的および倫理的基準を満たすよう確認する ・ プロジェクトの進行から完成まで生徒を指導する ・ 提出された作品が、生徒本人が取り組んだものであることを保証する ・ 本ガイドが示す評価基準に照らし合わせて、MYPプロジェクトを評価する ・ 学校が定める評価プロセスの標準化に参加する ・ MYPコーディネーターがIBインフォメーションシステム（IBIS）に入力するための、「パーソナルプロジェクト」の成績を提供する（2016年より）
生徒が得るべき情報と指導の例
・ MYPプロジェクトに関するガイドライン ・ 締め切りまでのスケジュール ・ プロジェクトの評価基準 ・ プロセスジャーナルの記入と使い方についてのアドバイス ・ 自主的な分析と振り返りの重要性 ・ 形成的フィードバック ・ 学問的誠実性の要件

表3

生徒に対する指導教員の責任

指導教員はプロジェクトの始めから終わりまで生徒を支援します。本ガイドの「MYPコミュニティプロジェクトの完成」と「MYPパーソナルプロジェクトの完成」の項には、指導教員と生徒向けの、各プロジェクトに関する具体的な情報が記載されています。

図書館、メディアセンター、リソースセンターの役割

図書館、メディアセンター、リソースセンターは、生徒にとって重要なリソースです。プロジェクトのプロセスに、図書館司書やリソースの専門家が関わることが推奨されています。図書館司書やリソースの専門家は、生徒のリサーチスキルを補い、リソースを探し

て手に入れる手伝いをするほか、参考文献の選択や参考文献目録の作成といった分野でも生徒をサポートできます。

コミュニティの専門家の役割

生徒は、コミュニティ内で専門家を見つけて協力を仰ぐこともできます。専門家とは、リサーチや証拠^{エビデンス}の入手を円滑にし、スキルや知識を広げる情報を提供し、非常に優れた実践の手本となる人物です。この場合、コミュニティのメンバーがプロジェクトの始めから終わりまで生徒を支援することになりますが、プロジェクトの評価はしません。学校がこのような役割を取り入れる場合、生徒はプロジェクトの目標と評価について引き続き指導教員の指導を受けることが重要です。生徒の安全のため、外部の専門家が参加する場合は、学校は学校の方針とあらゆる法的要件を参照する必要があります。

MYPプロジェクトに必要な時間

生徒は、「コミュニティープロジェクト」に約15時間、「パーソナルプロジェクト」に約25時間を費やすことが期待されます。この時間には次のことが含まれます。

- ・ 指導教員とのミーティング
- ・ プロジェクトのリサーチから計画、展開、完成に至る個人学習
- ・ プロジェクトに関する報告

学校は、「MYPプロジェクト」を進める上で重要となる段階を割り出して、実現可能な日程を決めます。リサーチ、プロジェクトの目標達成、プロジェクトの発表やレポートの作成に必要な時間のバランスを考慮する必要があります。

表4は、「MYPプロジェクト」を計画する学校の役に立つと思われる事柄のリストです。

プロジェクトを計画する際に学校が考慮すべきこと
・ 必要な指導教員の人数 ・ 指導教員の選出と研修 ・ 生徒へのプロジェクトに関する情報提供 ・ 指導教員と生徒のための予定表 ・ 指導教員が生徒または生徒のグループとミーティングを行う日程 ・ プロジェクト管理の書類作成 ・ プロジェクトのための図書館、情報技術、コミュニケーション技術のリソース ・ 校内でのプロジェクトの標準化 ・ プロジェクトの目的、性質について保護者に通知 ・ プロジェクト完了時の発表展示

表4

MYPプロジェクトの時間枠について学校が考慮すること

プロジェクトの指導教員は、プロジェクトの始めから終わりまで生徒を指導する必要があります。生徒と指導教員がミーティングを行う頻度は、プロジェクトの種類、トピック、プロジェクトを行う生徒の特性、プロジェクトの段階に応じて異なります。

さまざまな日程が必要になるため、学校は次のような方法を検討するとよいでしょう。

- ・ 生徒が指導教員に会ったり進捗を報告したりできるよう、長い期間の中で柔軟なスケジュールを組む
- ・ 生徒がさまざまな段階で特定教科の教師に会えるよう、「ドロップイン」セッションの時間をつくる
- ・ 定期的集まってグループ作業やミーティングを行う日時を決める

MYPプロジェクトで使用する言語

コミュニティープロジェクト

「MYPコミュニティープロジェクト」の作成と発表は、原則として学校の指導言語で行われます。しかし生徒には、その生徒が最も得意とする、あるいは選択する言語で、「コミュニティープロジェクト」を発表する機会が与えられるべきです。次の条件に当てはまる場合は、その言語が生徒の母語や学校の指導言語でなくても構いません。

- ・ 学校内のすべての「コミュニティープロジェクト」に適用される評価基準と同じものが、そのプロジェクトの評価にも適用される。
- ・ 学校は、その内部評価と校内での標準化のために有意義なプロセスを策定する。

生徒が選んだ言語で指導監督できるスタッフが学校内にいない場合、学校はコミュニティーから指導監督者を選ぶことができます。生徒の健康と安全を最優先とし、指導監督者が生徒に接触する時間には現地の法令が影響することがあります。指導監督者の拠点が学校コミュニティーの外にある場合は、必ず学校のスタッフと同じ情報が与えられるよう取りはからいます。外部の指導監督者は定期的に生徒に会い、学校スタッフの指示のもとで指導を行う必要があります。

学校が生徒に対して「コミュニティープロジェクト」の監督をどう割り当てるかについては、学校スタッフと保護者それぞれの助言を得て、長期的な枠組みの中で決める必要があります。言語能力に関する計画と育成については、学校による継続的な取り組みの一環として常に保護者と連絡を取り合うべきです。

パーソナルプロジェクト

「パーソナルプロジェクト」の制作と発表は、MYPの評価に使われている言語のひとつで行うこと。学校にいる教師は、指導言語以外の言語で「パーソナルプロジェクト」を行う生徒の評価と校内での標準化ができなければならない。

「パーソナルプロジェクト」のモデレーション（評価の適正化）を行うことができるMYPの使用言語についての詳細は、IB資料（英語版）『*Guide to MYP eAssessment*（MYP eアセスメントガイド）』および同『*Handbook of procedures for the Middle Years Programme*（MYP手順ハンドブック）』に掲載されています。

学問的誠実性

MY Pプロジェクトを行う際、生徒と指導教員は必ず I B が定める学問的誠実性宣誓書を用いて、ミーティングの日付と話し合いの要点を記録し、課題の学問的誠実性を明らかにすること。

宣誓書のフォームは本ガイドの付録に記載されています。

必要なミーティングの記録は3回のみです。ほとんどの場合は、プロジェクトの開始時、進行中、修了時のミーティングを記録します。最終レポートの提出または発表を行う際に、生徒と指導教員は最終宣誓書に署名し宣誓しなければなりません。

MY Pプロジェクトにおける探究

「コミュニティープロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」は、生徒が自分なりの探究を始め、推し進め、方向を決める能力を反映している、「探究」の集大成と言えます。

生徒は「MY Pプロジェクト」で行う探究の中で、知識と理解を深め、スキルと考え方を成長させる、さまざまな活動に取り組みます。こうした生徒が自ら計画する学習活動には、次のようなものがあります。

- ・ 何について学ぶかを決める。すでに何を理解しているかを確認する。プロジェクトの完成には何が必要かを見いだす。
- ・ プロジェクトの計画案や評価規準を作成する。時間や資料の計画を立てる。プロジェクトの進展を記録する。
- ・ 意志を決定したり、理解を深めたり、問題を解決したり、指導教員や他の人々と情報交換する。そして作品や成果を生み出す。
- ・ 作品や成果を評価し、自分のプロジェクトと学習したことを振り返る。

生徒は、自ら行動を起こして方向を定める学習過程をたどるにつれ、トピックに関する深い知識を得、それと同時に学習者としての自分を知ることが、より容易にできるようになります。

MYPプロジェクトにおける「行動」

「行動」（実践と体験を通じた学習）とグローバルな関わりは、IBの理念と実践の中核です。信念ある行動の奨励はMYPの重要な特徴の1つであり、それが持続的な探究や批判的な振り返りと結びついたとき、生徒は「IBの学習者像」のこうした特性を身につけることができます。

信念のある行動は、学習指導の一環として取り組む場合や、学習成果として行われる場合のいずれにおいても、実践的で実社会での経験から学ぶことを重視するIBの「指導観」や「学習観」を表しています。IBの学習者は家庭や教室、学校、地域社会、そしてより広い世界で行動します。行動には実践を通じた学習が伴い、自分自身と他の人々についてより良く学ぶことができます。IB認定校では、規範ある誠実で正直な行動や、個人と集団の尊厳を尊重する強い公正性に基づく行動を重んじます。信念のある行動は責任ある選択を意味し、それは時に行動しないという決断も含まれます。個人も、組織も、コミュニティーも、個人的な課題やグローバルな課題の倫理的側面を探究することで、信念ある行動と向き合います。IBプログラムにおける「行動」には、サービスマーケティング（奉仕活動を通じた学習）、アドボカシー（権利擁護や提言）、自己や他の人々への教育なども含まれています。

IB資料『国際バカロレア（IB）の教育とは？』（2014年刊行）

キャサリン・バージャー・ケイが著書『*The Complete Guide to Service Learning*（サービスマーケティング完全ガイド）』（2010年刊行）で発表したサービスマーケティングの5つの段階は、「MYPプロジェクト」における目標と評価規準の基盤です。図4が示す一連の段階は、学習者像の特性を育むために役立つ枠組みを提供しています。最終段階となる5つめの段階は「実証」で、「MYPプロジェクト」では発表またはレポートを指します。

- a. 「調査」では、どのような機会があるかを検討する際に使うため、生徒のもっている興味、スキル、素質を書き出す。この分析には、アクションリサーチを通して特定されるニーズに関する情報収集を必要とする。アクションリサーチには、メディア、専門家へのインタビュー、多様な人々を対象とした調査、直接観察や個人的体験といった、さまざまなアプローチが含まれる。
- b. 「準備」では、役割、責任、とるべき行動、必要なリソース、時間枠をはっきりと定めた奉仕活動を生徒が計画し、計画を成功させるために必要なスキルを習得する。

- c. 「行動」では、計画を実行する。生徒は、ひとりで、他の生徒と協力して、生徒同士でグループをつくって、あるいは生徒以外の人々と協力して、作業することができる。
- d. 「振り返り」では、何が起きたかを説明し、感じたことを述べ、アイデアを出し、質問をする。振り返りは、理解力と統合力を判定し、計画の見直しや修正を助け、経験したことを身につけるため、これまでの流れをまとめる形で断続的に行う。
- e. 「実証」では、自分が何をどのように学び、何を成し遂げたかを明らかにして、経験の全貌をとらえながら、メタ認知を行う。さまざまなテクノロジー機器の利用が推奨される。

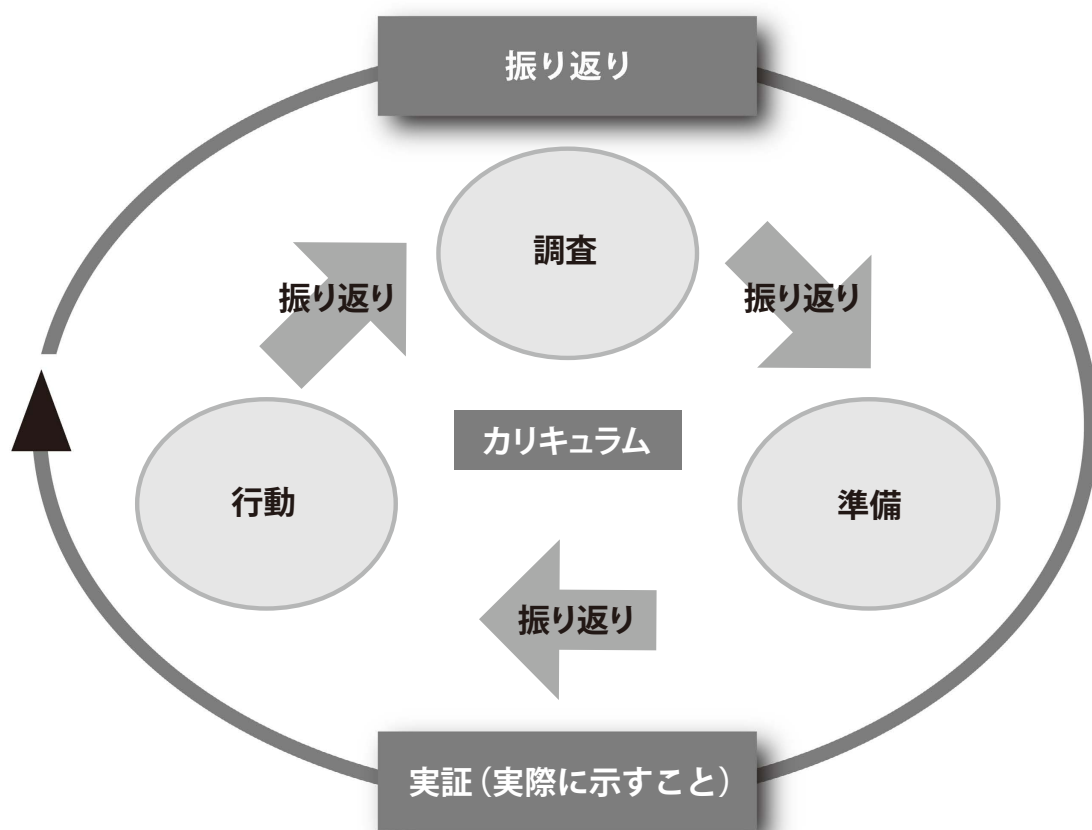


図4

サービスラーニング（奉仕活動を通じた学習）のモデル

生徒の選択や計画は、興味、スキル、才能、知識から生まれて育っていくため、これら5つの段階を経ることが、生徒の自発性を促し、支援します。

「行動」は、2つの「MYPプロジェクト」で多少異なる場合があります。

コミュニティープロジェクト：サービスラーニング

「コミュニティープロジェクト」において、「行動」はサービスラーニング（奉仕活動を通じた学習）への参加を伴います。

サービスラーニングのプロセスをたどるにつれて、生徒は次のタイプの行動の1つまたは複数に関与します。

- ・「直接的な奉仕活動」人、環境、動物との交流を行う。例として、1対1の個別指導を行う、難民と共に庭造りをする、引き取りに備えて保護犬のしつけをする、など。
- ・「間接的な奉仕活動」奉仕活動中に受益者とは会わないが、自分の活動がコミュニティーや環境のためになることを確認する。例として、組織のウェブサイトのデザインを改新する、言語を教えるオリジナルの絵本を制作する、小川の復元のため魚を育成する、など。
- ・「アドボカシー（権利擁護や提言）」公共の利益に関わる問題について行動を促すために、理念や懸案事項を代弁する。例として、コミュニティーにおける飢餓についての啓蒙活動を始める、いじめを排除し敬意をもつことをテーマにした劇を上演する、持続可能な水の供給についてのビデオを制作する、など。
- ・「リサーチ」方針や実践に影響を与えるため、重要なトピックについての情報をさまざまな場所から集め、データを分析し、報告する。例として、自分の学校に影響を与える環境調査を行う、動物の移動パターンの研究に貢献する、公共空間のごみを減らす最も効果的な方法をまとめる、など。

パーソナルプロジェクト：信念のある行動

「パーソナルプロジェクト」における「行動」には、個人の選択が関与します。そこには、MYPの学習を知識や理解を越えて広げ、社会的責任をもった考え方や、学習プロセスの結果として生徒が自ら実践する思いやりのある適切な行動が含まれます。

「パーソナルプロジェクト」における信念ある行動は、コミュニティーへの奉仕活動という形をとらない場合もありますが、探究のプロセスは変わりません。

MYPの「パーソナルプロジェクト」における生徒の学習プロセスは、次のような幅広い形式の行動を伴います

- ・科目固有のカリキュラムを超えて、興味のある分野への関心を深める。
- ・新たに理解した内容を、クラスメートや教師、家族と共有する。
- ・得た知識に応じて自らの行動を変え、自らの決断や行動によって変化を起こせることを認識する。

信念ある行動は、はっきりと目に見えたり即座に成果が出るとは限りません。生徒は、学んだことが自分の考え方や行動にどのように影響を与えたかを記録し、振り返ることが重要です。

振り返りのプロセスは最後にまとめて行うのではなく、プロジェクトの期間を通して行うものです。探究プロセスやプロジェクトのさまざまな段階でとった行動について、生徒が定期的に振り返るよう促すことが大切です。

「パーソナルプロジェクト」も、「コミュニティープロジェクト」と同じように、「調査」、「計画」、「行動」、「振り返り」、「実証」という段階を追って展開します。「パーソナルプロジェクト」では「実証」として、「調査」、「計画」、「行動」、「振り返り」という最初の4つの段階の生徒のプロセスの概要を示すレポートを提出します。

グローバルな文脈

グローバルな文脈は、人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任について、生徒ひとりや他の人々と共に行う探究へと学習を導きます。世界を、学習のための最も広い文脈として生かす「MYPプロジェクト」では、次のような意義ある調査を行うことができます。

- ・ アイデンティティーと関係性
- ・ 空間的・時間的位置づけ
- ・ 個人的表現と文化的表現
- ・ 科学技術の革新
- ・ グローバル化と持続可能性
- ・ 公正性と発展

生徒は、自らの探究の妥当性（なぜ重要であるか）を立証するため、これらのグローバルな文脈のいずれかを「MYPプロジェクト」のために選ぶこと。

生徒は、プロジェクトの焦点となるグローバルな文脈を選ぶ際に、次の点を考慮できます。

- ・ 「パーソナルプロジェクト」を通して成し遂げたいものは何か。
- ・ 自分の成果物を通して人々に理解してほしいことは何か。
- ・ 自分のプロジェクトでどのような影響を与えたいか。
- ・ どうすれば、その文脈がプロジェクトにより大きな目的を与えることができるか。

組織のための募金運動やイベントを計画する場合、生徒はその組織が取り組んでいる課題（環境汚染、気候変動、絶滅危惧種、健康、教育、住居、食料、人権、少数派の権利、移民、文化、アート、コミュニケーションなど）を探究します。そのため、グローバルな文脈は、多くの場合その組織の理念によって決定されます。

グローバルな文脈の選択によって、「MYPプロジェクト」の全体像は大きく変わります。表5と6は、グローバルな文脈が「パーソナルプロジェクト」のトピックや論点に及ぼす影響を示しています。

グローバルな文脈	例
アイデンティティと関係性	「なぜラップは自分の胸に響くのか」という疑問を検討する。
空間的・時間的位置づけ	世界各地での、音楽スタイルとしてのラップの発展を調査する。
個人的表現と文化的表現	クラスメートの前でラップを歌い、質疑応答のセッションを行う。

表 5

音楽ジャンルとしてのラップ

グローバルな文脈	例
科学技術の革新	組み立て説明書が付いた太陽エネルギー装置の 3 D モデルを設計する。
空間的・時間的位置づけ	古今を通じて、さまざまな文化が異なるニーズに向けてどのようにエネルギーを活用してきたかを調べる。
グローバル化と持続可能性	「金持ちが地球を破壊する」というエルヴェ・ケンプの考えについて議論する。

表 6

太陽エネルギー機器

学習の方法

「MYPプロジェクト」は、生徒が「学習の方法」(ATL)のスキルを身につけたと自分なりの方法で示すことで、活動を締めくくります。

生徒が教科を通して身につけたATLスキルは、生徒がより自主的に学び、長い時間をかけて「MYPプロジェクト」を完成する助けになります。さまざまな教科の中で実施されるプロジェクト、小論文、^{エッセイ}研究は、生徒が「MYPプロジェクト」を完成させるために必要なスキルと考え方を身につける重要な手段や方法です。

ATLスキルは、学習者がひとりで、または他の人々と協力して学び、学習したことを行動で示し、学習のプロセスを振り返るための、確かな基礎をつくります。また、生徒がより自主的に学び、具体的な計画を立て、自発的に行動することを助け、結果として生徒が地元やグローバルな文脈に責任をもって参加するのに役立ちます。

表7は、ATLスキルとプロジェクトの目標の間で考えられる整合性を示しています。ここで重要なのは、ATLスキルが「MYPプロジェクト」のすべての段階にわたる結びつきの中で効果を発揮し、プロジェクト全体を支え、多くの場合プロジェクト間で重複するものだとして理解することです。

生徒は、どのように目標を達成したかを、プロジェクトの終わりに発表やレポートで示します。その際、ATLスキルのコミュニケーション、体系化、振り返りを生かし、わかりやすく正確で、適切なコミュニケーションを行うことが期待されます。

生徒はプロセス全体を通して、気配り、粘り強さ、感情管理、自発性、立ち直る力といった、情動スキルを身につける機会を得ます。こうしたスキルは、心理状態をうまくコントロールし、プロジェクトに対して健康でバランスのとれたアプローチをする助けになります。

コミュニティープロジェクト の目標	パーソナルプロジェクトの 目標	MYPにおけるATLスキル	情動スキル…気配り、粘り強さ、感情管理、自発性、立ち直る力
目標A：調査			
i. 個人的な興味に基づき、コミュニティーのニーズに対応するための目標を設定する	i. 個人的な興味に基づき、プロジェクトの明確な目標と文脈を定義する	協働 クリティカルシンキング 批判的思考 創造的思考	
ii. プロジェクトと関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認する	ii. プロジェクトと関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認する	情報リテラシー メディアリテラシー	
iii. リサーチスキルを示す		転移	
目標B：計画			
i. コミュニティーのニーズに取り組むための行動案を作成する	i. 作品や成果の評価規準を定める	協働 体系化 批判的思考 創造的思考	
ii. プロジェクトの進行過程を計画し記録する	ii. プロジェクトの進行過程を計画し記録する	協働	
iii. 自己管理スキルを示す		体系化 振り返り	
目標C：行動			
i. プロジェクトの成果として、「行動」としての奉仕活動を行う	i. 目標、文脈、評価規準に応じて、作品や成果を生み出す	体系化 創造的思考 批判的思考	
ii. 思考スキルを示す	ii. 思考スキルを示す	コミュニケーション	
iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを示す		協働 批判的思考 創造的思考 トランスファー 転移	
目標D：振り返り			
i. 行動案に照らし合わせて「行動」としての奉仕活動の質を評価する	i. 自分の評価規準に照らし合わせて、作品や成果の質を評価する	コミュニケーション 振り返り	
ii. プロジェクトの完了により、サービスラーニングについての知識と理解がどのように深まったかを振り返る	ii. プロジェクトの完了により、トピックやグローバルな文脈についての知識と理解がどのように深まったかを振り返る		
iii. ATLスキルの発達を振り返る	iii. プロジェクトを通してのIBの学習者としての成長を振り返る		

表7

ATLスキルとプロジェクトの目標

プロセスジャーナル

「コミュニティープロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」のどちらにおいても、生徒はプロジェクトの進展をプロセスジャーナル（記録日誌）に記録することが期待されています。この方法で、生徒は学習行動や学問的誠実性を実証します。

プロセスの記録

「プロセスジャーナル」とは、生徒がプロジェクトの初めから終わりまでを書きとめた進捗記録を指す用語です。記録に使うメディアは、生徒の選択により異なります。文字、映像、音声、もしくはこれらを組み合わせてもよく、書面と電子フォーマットの両方を含んでも構いません。電子／デジタルメディアを使用する場合はデジタルコピーを作成するか、オンラインストレージにコピーを置くことを強く推奨します。

生徒は、プロセスジャーナルを使ってプロジェクトの進捗を記録する習慣を身につけます。また、アートプロセスジャーナルやデザインフォルダーなど、さまざまな教科でのワークブックを作成する技術を利用することもできます。学校はテンプレートや作成例を配布して生徒の日誌作りを支援することができますが、生徒が自分で考えた形式やデザインを使うこともできます。

生徒が進捗の記録方法についても模索するという意味から、プロセスジャーナルは生徒個人のものです。生徒は、画一的な記録方法に限定されず、自由に作成できます。ただし、生徒は自分の最高の出来映えを 評価の対象としてもらうためにも、4つの目標に取り組んだ証拠を、プロセスジャーナルを使って証明する責任があります。

プロセスジャーナルの使い方	間違った使い方
・ プロジェクトの始めから終わりまで進展を記録する ・ 興味、プロセス、成果の展開を記録する ・ 初めの考えとその後の展開、ブレインストーミング、起こりうる質問、新たに起こった疑問を書き留める ・ 教師、指導教員、プロジェクトに寄与する外部の人々など、情報提供者とのやり取りを記録する ・ 参考文献を選び、注記を付け、編集する際の記録や、参考文献一覧の維持に使う ・ 引用文、図版、アイデア、写真など役立つ情報を保管する ・ 着想や解決策を吟味する方法として使う ・ 完了した作品を評価する場所として使う ・ 振り返りや学習の場として使う ・ 生徒が、自分のニーズに合った形式を考案する ・ 振り返りや、受けた形式的フィードバックを記録する	・ 毎日記入する(この方法が生徒にとって有益な場合を除く) ・ プロセスが完了したあとにまとめて記入する ・ プロジェクトに加えてさらにやらなければならない作業と受け止める(プロセスジャーナルはプロジェクトの一部でありプロジェクトをサポートするもの) ・ 行った内容を詳しく記録する日記として使う ・ 1つの形式だけを使った、変化のない記録

表 8

プロセスジャーナルの使用法

生徒は、制作過程の証拠を記録したプロセスジャーナルを、ミーティングの際に、またはインターネットなどを通して、指導教員に見せます。読みやすさも大切ですが、見栄えや体裁よりも、批判的思考や創造的思考と振り返りの記録がより重要です。

プロセスジャーナルの抜粋の選択

生徒は「コミュニティプロジェクト」と「パーソナルプロジェクト」のどちらにおいても、すべての基準を満たしていることを示す証拠を、プロセスジャーナルから慎重に選びます。こうした抜粋を、プロジェクトの終わりにレポートまたは発表の付属資料として提出します。生徒は、指導教員に見せられるよう、適切な抜粋を作成する責任があります。

ひとりでプロジェクトを行う生徒は、プロジェクトの主な進展を表す抜粋を、最大10件選びます。グループで「コミュニティプロジェクト」を行う生徒は、プロセスジャーナルから最大15件の抜粋を提出します。

生徒は、自分がどうやって各目標に取り組んだかを示す抜粋を選ぶか、こうした情報がわかるよう抜粋に注釈を付ける必要があります。

抜粋には次を含むことができます。

- ・ 考えを視覚化した図表
- ・ 箇条書きのリスト
- ・ 図表
- ・ 短い文章

- ・ 覚え書き
- ・ 予定表、行動計画
- ・ 注釈付きの図
- ・ 注釈付きの参考文献
- ・ 博物館、公演、美術館で刺激を受けた作品など
- ・ 絵画、写真、スケッチ
- ・ 最大30秒の映像または音声素材
- ・ ブログやウェブサイトのスクリーンショット
- ・ 自分やクラスメートによる評価のフィードバック

プロジェクトの達成に直接関係がある資料も必要に応じて抜粋に含めます。例えば、生徒がアンケートなどの調査を行い、その内容や分析がレポートで紹介されている場合は、調査結果の一部を抜粋に取り入れて構いません。

それぞれの抜粋には、生徒がプロセスの記録に使ったあらゆる形式を含むことができます。抜粋は証拠の裏づけとしてのみ使用され、個別の評価は与えられません。

リソース

調査と計画のためのリソース

生徒は、「MYPプロジェクト」を行うために、多様な情報源の中から関連性と信頼性のある情報を選びます。プロジェクトの性質によってリソースの数や種類は異なります。しかし、調査探究を通して最上位レベルに達するためには、生徒はさまざまな種類の、多岐にわたる情報源を選ぶ必要があります。生徒は、ATLスキルを通して情報源の信頼性を判断する力を身につけます。特に情報リテラシーとメディアリテラシースキルが役に立ちます。著者を信用できるか、情報源は普及しているか、正確か、関連性があるか、誰に向けて書かれたものか、客観性があるかといった要因を考慮する必要があります。

供給源には、生徒の予備知識や、一次資料と二次資料などがあります。たとえば、学習した科目の内容、重要な人物、調査データ、印刷メディア、インターネットのリソース（多岐にわたるリソースを提供）、ビデオ録画または音声録音、画像などです。

予備知識を情報源に含めることができますが、予備知識のみではプロジェクトの探究としては掘り下げや広がり十分ではありません。

情報源はプロジェクトの初期段階で選びますが、情報源の調査と評価はプロジェクトの完了に向けて継続して行われます。これらの情報源から得た情報をプロセスジャーナルに記録して、注釈や活用の可能性を書き添えるとよいでしょう。

生徒はプロジェクトを進めながら、いつ、どのような行動を起こすかを決めたり、プロセスジャーナルに記録を付けたりする際に、情報を活用します。生徒は、情報源から得た情報にもとづく意思決定を忘れずに記録すべきです。それらは、思いがけない状況で、すでにもっている知識と新しく得た知識をつなげ、解決策を与えてくれます。

学習成果を示すリソース

ある段階に達した時、生徒は「コミュニティプロジェクト」の発表や「パーソナルプロジェクト」のレポートの準備に着手できるようになります。ここで、プロジェクトを行うことで自分が何を学習したかを振り返る必要があります。ここまでの学習とはすなわち、科目固有の学習で教わったトピックそしてその学習のトピックを^{トランスファー}転移させることが自分のプロジェクトにどう影響を与えたか、プロジェクトの目標とグローバルな文脈に関して自分が何を発見したかに関係するすべての事柄です。また、学習者としての自覚、もしくはATLスキルの育成とも関係します。

このすべてのプロセスを通して、生徒は自分が決定したことをプロセスジャーナルに記録し、この記録をプロジェクトの発表やレポート作成のためのリソースとして役立てます。

コミュニティプロジェクトの目標

「コミュニティプロジェクト」の目標は、学習のために設定された特定の達成内容を表します。これは、「コミュニティプロジェクト」を完了した結果として生徒が何を成し遂げられるかを定義しています。

生徒は、「MY P コミュニティープロジェクト」の4つの目標**すべて**がもつ、**すべての**要素に、**必ず**取り組むこと。

これらの目標は、本ガイドの「コミュニティプロジェクトの評価規準：第3年次または第4年次」に記載された評価規準に直接関連しています。

A 調査

生徒は以下のことができる。

- i. 個人的な興味に基づき、コミュニティ内のニーズに対応するための目標を設定する
- ii. プロジェクトと関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認する
- iii. リサーチスキルを示す

B 計画

生徒は以下のことができる。

- i. コミュニティーのニーズに取り組むための行動案を作成する
- ii. プロジェクトの進行過程を計画し記録する
- iii. 自己管理スキルを示す

C 行動

生徒は以下のことができる。

- i. プロジェクトの成果として、「行動」としての奉仕活動を行う
- ii. 思考スキルを示す
- iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを示す

D 振り返り

生徒は以下のことができる。

- i. 行動案に照らし合わせて、「行動」としての奉仕活動の質を評価する
- ii. プロジェクトの完了により、サービスマーケティングについての知識と理解がどのよう
に深まったか振り返る
- iii. ATLスキルの発達を振り返る

コミュニティプロジェクトの調査と計画

「MYPコミュニティプロジェクト」は3つの要素で構成されます。

コミュニティプロジェクトの構成要素	評価方法
「行動」としての奉仕活動に重点的に取り組むこと	発表で示される証拠
プロセスジャーナル（記録日誌）	レポートの付属書類として添えられた抜粋
発表	4つの評価規準すべてを使ってレポートの内容を評価

表9

コミュニティプロジェクトの要素

生徒は、「コミュニティプロジェクト」をひとりで行うか、3人までのグループで行うかを選ぶことができます。グループで行う場合、生徒たちはプロジェクトの目標に共同作業で取り組み、共にサービスマーケティング（奉仕活動を通じた学習）を行い、プロジェクトの終わりにはグループとして発表を行います。

研究の目標を決めるため、生徒はプロジェクトの焦点を絞る必要があります。ここでは、一連の手順を追って焦点を絞ります。生徒は、次のことを行います。

- ・ 個人的な興味に基づき、コミュニティのニーズに対応するための**目標**を設定する。
- ・ 「コミュニティプロジェクト」の**グローバルな文脈**を定める。
- ・ 「コミュニティプロジェクト」のための**行動案**を作成する。

グループでプロジェクトに取り組む場合は、全員が協力して目標を特定します。

コミュニティのニーズに取り組む目標を決める

目標の例には次のようなものがあります。

- ・ 関心を高める
- ・ 積極的に関与する
- ・ リサーチを行う
- ・ 他の人々に情報を伝える
- ・ 創造や革新を行う

- ・ 行動を変える
- ・ 権利を擁護する、または提言する

「ニーズ」とは、何かが必要とされている、あるいは求められている状況や状態、責任や義務、または、必要なもの、望ましいもの、役立つと思われるものの欠如を指します。

コミュニティは、地域、国内、インターネット、世界のいずれでも構いません。コミュニティには幅広い定義があります。MYPの重要概念である「コミュニティ」は、次のように定義されています。

「コミュニティ」は、空間、時間、関係という枠で捉えられ、個々が近接して存在している集団のことです。例えば、特定の特性や信条、価値観を共有する人々の集団や、特定の生息地で助け合って暮らす動物の群れがコミュニティです。

I B資料『MYP：原則から実践へ』（2016年1月刊行）

表10は、さまざまな種類のコミュニティの説明です。

コミュニティ	例		
同じ空間に居住する人々の集団	シンガポールのインド人地区に住む人々	ベルギーの市民	パプアニューギニアのコロワイ族
共通した特徴、信念、価値観のいずれかまたは複数の共有する人々の集団	ダウン症候群をもつ人々のインターネットフォーラム	菜食主義者	歴史クラブの3年生の生徒
共通の利害によって結びついた複数の州や国家	欧州連合（EU）	アメリカ合衆国	国連人権理事会
特定の居住環境で共に生育または生息する個々の植物や動物の集団	マダガスカル原産の鳥個体群	西アジアの中東に生息する植物相	韓国のエコリウムプロジェクト（湿地保護区）

表10
コミュニティの例

生徒は、コミュニティのニーズに自分がどう取り組むかについて合理的な評価をする必要があります。プロジェクトに与えられた時間枠の中で十分に到達できる目標をもつことで、自分に与えられた力を実感し、結果として、コミュニティに意義ある進歩をもたらす「行動」としての奉仕活動の影響を認識するはずです。プロジェクトがチャレンジに満ちたものであるかどうかは生徒が決めますが、指導教員の指導が必要です。ある生徒やグループにとって大がかりすぎる、または限定的と見られるプロジェクトも、他の生徒やグループにとっては完成しやすい、またはチャレンジに満ちたプロジェクトになります。

生徒は、教師やその他の妥当な人々にリソースとして参加してもらうことができますが、プロジェクトは必ず生徒の手で完成させなければなりません。

表11は、チャレンジに満ちた、または高度なチャレンジに満ちた「コミュニティープロジェクト」の例です。

チャレンジに満ちた目標	高度なチャレンジに満ちた目標
学校コミュニティー内でインターネット上のいじめ問題があることに気づき、情報キャンペーンを通して問題への認識を高める。	さまざまな学校関係者と交渉を行い、学校内で起きている生徒同士のインターネットでのいじめに対する懲戒処置の変更を働きかける。
地域の小児病院で人員不足が起きていることを知った生徒が、一定期間内の奉仕活動を行う。	子どものための人形劇を制作し、いくつかの学校や病院を回って上演する。
学校に隣接する地域の自閉症協会を支援する必要があると考えた生徒たちが、他の生徒たちに情報を与えるため、自閉症についての物語をつくる。	生徒たちが自閉症協会のメンバーと協力して子ども向けの物語を書き、それを出版する。さらに、学校の一般公開日に、協会のメンバーと共にその本を紹介する。
地域の病院やクリニックで必要とされる献血への認識を高める。	学校で行われる生徒主催の会議で、献血イベントを開く。

表11

チャレンジに満ちた／高度なチャレンジに満ちた「コミュニティープロジェクト」

プロジェクトのグローバルな文脈を定める

生徒が選んだグローバルな文脈は、プロジェクトに探究や研究のための文脈を与えます。生徒は、グローバルな文脈をひとつだけ選んで目標を決めます。その他のグローバルな文脈からも、プロジェクトに関する情報や新しい視点を得ることは多いでしょう。しかし、1つの文脈に重点的に取り組むことで、(自らに課した) 制約から機会が生まれ、プロジェクトの焦点が定まります。

表12は、「コミュニティープロジェクト」の要素に対応するグローバルな文脈の例を示しています。

目標	ニーズ	コミュニティ	グローバルな文脈
関心を高める	表現の自由	政治的圧力を受けていると見られる国民	個人的表現と文化的表現
活動に参加する	使役犬を訓練する	援助を必要とする障害をもった人々のコミュニティ	アイデンティティと関係性
リサーチを行う	汚染されていない飲料水を手に入れる	太平洋の島国	空間的・時間的位置づけ
他の人々に情報を与える	医療の供給（およびその入手方法）	さまざまな社会経済的グループ	公正性と発展
創造や革新を行う	医学の進歩	がん患者のための支援グループ	科学技術の革新
行動を変える	社会的支持	教師と生徒による学校コミュニティ	アイデンティティと関係性
権利を擁護する、または提言する	地域の廃棄物処理法を近代化する	全国規模のイベントの下準備として、地域の人々	グローバル化と持続可能性

表12

「コミュニティプロジェクト」におけるグローバルな文脈

生徒にとって、ブレインストーミングでアイデアを出す機会や、他の生徒や学校外の友人、親族、教師などの人々とアイデアについて話し合う機会が役立ちます。生徒は、自分のアイデアや思考を含めて、プロジェクトの発展を記録する必要があります。自分の目標についてのブレインストーミングをプロセスジャーナルに書き留めておけば、プロジェクトを進めながら読み返して課題から逸れていないか確かめることができるため、役に立ちます。

表13は、「MYP コミュニティプロジェクト」におけるグローバルな文脈の使用例を示しています。

グローバルな文脈	コミュニティプロジェクトの例
アイデンティティと関係性 次のことを探究する。アイデンティティ／信念と価値観／個人的、身体的、心的、社会的、精神的健康／家族、友人、コミュニティ、文化などの人間関係／人間らしさの意味	・ 笑い療法のキャンペーンを小児科病院や高齢者介護施設で行う。 ・ 小学生のための補習や特別指導のクラスを設ける ・ コーラ飲料が消化力に与える影響を調べ、学校の自動販売機で飲み物を買う際に健康的な選択を促すキャンペーンを行う

グローバルな文脈	コミュニティプロジェクトの例
空間的・時間的位置づけ 次のことを探究する。個人史／自分の家と旅路／人類の転換期／発見／人類による未踏の地への探検と移住／個人、地域、グローバルの視点から見た、個人と文明の関係と相互関連性	・ コミュニティー内の博物館や歴史協会の会員になり、地域の歴史の維持、修復、回復に貢献する ・ 車椅子でのアクセスがしやすくなるよう計画する ・ 地域コミュニティに設備が限定的であることを知り、問題点と可能な対策をまとめた記事を校内誌に掲載して、子ども用施設の改善を図る
個人的表現と文化的表現 次のことを探究する。私たちが意見、感情、気質、文化、信念、価値観を理解し、それを表現する方法／自らの創造性を振り返り、展開し、楽しむ方法／美に対する理解	・ 地域の病院の廊下を飾る絵画のシリーズを制作し、病院の雰囲気を良くする ・ いじめに関する認識を高めるため、劇を上演する ・ グラフィティアートのコンテストを開催して、多様な文化の理解を図る
科学技術の革新 次のことを探究する。自然界とその法則／人間と自然が相互に与える影響／人間が理解する科学原理の利用法／科学とテクノロジーの発展がコミュニティや環境に及ぼす影響／環境が人間の行動に及ぼす影響／人間のニーズに合わせた環境の利用法	・ 地域コミュニティがエネルギー機器を低コストで効果的に使用できるよう、支援する ・ 家庭用機器への風力発電の利用を促進する計画を立てる ・ 紙の使用を減らしリサイクルを促進するキャンペーンを行う ・ 水、電力、燃料の無駄づかいを減らすキャンペーンを行う
グローバル化と持続可能性 次のことを探究する。人工のシステムとコミュニティの相互関連性／地域のプロセスとグローバルなプロセスの関係／地域の体験をグローバルな体験へつなげる方法／世界の相互関連性がもたらす機会と緊張／意思決定が人類や環境に及ぼす影響	・ プラスチック製ストローに対する認識を高め、無駄づかいを減らすキャンペーンを行う ・ 再緑化の必要な地域への植樹計画を地方自治体に提出する ・ 学校やコミュニティに庭をつくる
公正性と発展 次のことを探究する。権利と義務／コミュニティ間の関係／限りある資源の、他人や他の生物との共有／機会均等を手に入れる権利／平和と紛争解決	・ フェアトレードに関する認識を高めるキャンペーンを行う ・ 地域の識字率改善に取り組むNGOを支援するなど、教育の機会に貢献する ・ 移民や移住集団に関する懸案事項に取り組む

表13

グローバルな文脈とMYPプロジェクト

生徒は、これまでの経験や科目の学習で得た知識を認識し、自分のもつ知識が目標の達成にどう役立つかを記録する必要があります。この事前学習によって、リサーチや今後の研究を通して身につける必要がある知識やスキルを判断できるようになります。

プロジェクトのための行動案をつくる

生徒は、自分のプロジェクトの目指す成果や「行動」としての奉仕活動について確信がもてたとき、計画案をつくることができます。プロジェクトを行うためには、特定の課題や行う活動についての計画が必要です。行動案の準備には、チェックリスト、ルーブリック（評価指標）、スケジュール、フローチャートなど、さまざまな方法が利用できます。

プロジェクトは計画案に従って進め、デザイン、問題解決、意思決定、探究といった活動を行います。行動案は、使える時間やリソースに基づいた達成可能なものである必要があります。時間がかかりすぎたり、あまりにも複雑な手順が必要なプロジェクトもあれば、簡単すぎたり、取り組む課題が少なすぎるプロジェクトもあり得ます。生徒にとって現実的なプロジェクトかどうかの判断は、生徒と指導教員との話し合いによって決められます。生徒は行動案をプロセスジャーナルに記録し、最終的な「行動」としての奉仕活動の評価に使います。

コミュニティプロジェクトの発表

「コミュニティプロジェクト」の最後に行う発表は、受け手に向けた口頭での発表です。受け手とは、教師、クラスメート、家族、友人、もしくはより大きいコミュニティなどが考えられます。

- ・ ひとりでプロジェクトを行った生徒の場合、発表時間の割り当ては6～10分
- ・ グループによる発表の場合、発表時間の割り当ては10～14分

グループでのプロジェクトを選んだ生徒はグループ発表を行います、発表ではグループの全員が発言する機会をもつ必要があります。

発表形式は、「MY P コミュニティープロジェクト」の目標に従って構成されます。生徒は発表の計画を立て、原稿を書き、リハーサルを行い、必要な資料を用意しておきます。指導教員が、各生徒やグループにつき発表のリハーサルをそれぞれ1回確認するとよいでしょう。

学校は、発表の手本になり得る例として、10代の生徒によるさまざまなTED x の発表を生徒に見せることもできます。TED x の発表は、<http://www.ted.com/tedx> で「teen」と検索するか、www.tedxteen.com にアクセスすると視聴できます。

発表の際に、必ず次のものを「コミュニティプロジェクト」の指導教員に提出する。

- ・ 各生徒の記入済みの学問的誠実性宣誓書
- ・ 行動案
- ・ プロセスジャーナルの抜粋
- ・ 発表で使用する視覚資料
- ・ 参考文献一覧や情報源

グループでプロジェクトを行った生徒は、「コミュニティプロジェクト」の進行を表す、各メンバーのプロセスジャーナルからの抜粋を提出します。それぞれの貢献がよくわかるよう、グループ全員が同じ量の抜粋を提出するとよいでしょう。プロセスジャーナルからの抜粋は、グループの場合は最大15件、個人の場合は最大10件の提出が認められます。

ひとりでプロジェクトを完成させ発表を行った生徒は、プロジェクトにおける生徒個人の到達レベルの評価が与えられます。

グループでプロジェクトを行った生徒に対して、指導教員はグループの各生徒に同じ到達レベルの評価を与えます。他の生徒と協力してプロジェクトを行うことで、チームワークやチームとしての達成に対する理解が深まります。酌量すべき事情がある場合、また共同

作業に関する地域の方針と慣例がある場合、指導教員は「コミュニティプロジェクト」への参加と活動に対して、生徒ごとに異なる到達レベルの評価を与えることができます。

発表の形式には次の2つは含んではいけません：質疑応答セッション、正式なインタビュー。（これは生徒のプレゼンをさらに評価するためや、発表そのものが受ける到達レベルの評価の調整に用いるためです。）

その他のアドバイス：口頭での発表の例についてはTSMを参照してください。発表形態にかかわらず、生徒は利用した情報源を必ず公開しなければなりません。

評価規準の使用

「MYPコミュニティプロジェクト」は、配点比率の等しい4つの評価規準に準拠した「絶対評価」を採用しています。

規準A	調査	最高点8
規準B	計画	最高点8
規準C	行動	最高点8
規準D	振り返り	最高点8

表14

「MYPコミュニティプロジェクト」では、4つの評価規準**すべて**において、**すべての**要素を**必ず**評価すること。

MYPでは、目標が評価規準に対応します。それぞれの評価規準には8つの到達レベル（1～8）があり、基本的に「限定的」（1～2）、「まずまず」（3～4）、「十分」（5～6）、「非常に優れている」（7～8）の4つの規準に分けられます。それぞれの規準には「レベルの説明」があり、教師はこれを使って、生徒の成長と達成に最も適合するレベルを選びます。

本ガイドは、MYPの第3年次または第4年次で行う「コミュニティプロジェクト」に**必要な評価規準**を掲載しています。国や地域の要件に応じて、学校は評価規準を追加し、付加的な評価モデルを使用することができます。学校は、必ず本ガイドに掲載されたとおりの適切な評価規準を使って、プログラムにおける生徒の最終的な成果を報告しなければなりません。

コーディネーターと指導教員は、評価規準に直接言及して、「MYPコミュニティプロジェクト」に期待されることを明らかにします。評価課題ごとの説明では、生徒が何を知り、どう行動することが期待されているかを明確にする必要があります。その場合、次のような形式を用いることができます。

- ・ 直接の、またはインターネットなどを通じた対話
- ・ 説明会
- ・ 学校のイントラネットに作られた、詳しいアドバイスのページ

コミュニティプロジェクトの評価規準： 第3年次または第4年次

規準A：調査

最高点8

「コミュニティプロジェクト」において、生徒は以下のことができる。

- i. 個人的な興味に基づき、コミュニティ内のニーズに対応するための目標を設定する
- ii. プロジェクトと関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認する
- iii. リサーチスキルを示す

到達レベル	レベルの説明
0	生徒は、以下に記された基準に 達していない
1-2	生徒は： i. 個人的な興味に基づき、コミュニティ内のニーズに対応するための目標を設定しているが、掘り下げや到達しやすさが限定的である ii. 既習事項と科目固有の知識を確認しているが、事例や関連性が不足している iii. リサーチスキルを限定的に示している
3-4	生徒は： i. 個人的な興味に基づき、コミュニティ内のニーズに対応するための目標をまずまずのレベルで述べている ii. プロジェクトの一部と関連性のある、基本的な既習事項と科目固有の知識を確認している iii. リサーチスキルをまずまずのレベルで示している
5-6	生徒は： i. 個人的な興味に基づき、コミュニティ内のニーズに対応するための明確でチャレンジに満ちた目標を設定している ii. プロジェクトの大部分と関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認している iii. リサーチスキルを十分に示している
7-8	生徒は： i. 個人的な興味に基づき、コミュニティ内のニーズに対応するための明確で高度なチャレンジに満ちた目標を設定している ii. プロジェクト全体にわたり大いに関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認している iii. 非常に優れたリサーチスキルを示している

規準B：計画

最高点8

「コミュニティプロジェクト」において、生徒は以下のことができる。

- i. コミュニティーのニーズに取り組むための行動案を作成する
- ii. プロジェクトの進行過程を計画し記録する
- iii. 自己管理スキルを示す

到達レベル	レベルの説明
0	生徒は、以下に記された基準に 達していない
1-2	生徒は： i. コミュニティーのニーズに取り組むための行動案の作成が限定的である ii. プロジェクトの進行過程の計画や記録が不十分、または不完全である iii. 自己管理スキルを限定的に示している
3-4	生徒は： i. コミュニティーのニーズに取り組むための行動案をまずまずのレベルで作成している ii. プロジェクトの進行過程をまずまずのレベルで計画し記録している iii. 自己管理スキルをまずまずのレベルで示している
5-6	生徒は： i. コミュニティーのニーズに取り組むためにふさわしい行動案を作成している ii. プロジェクトの進行過程を十分に計画し記録している iii. 自己管理スキルを十分に示している
7-8	生徒は： i. コミュニティーのニーズに取り組むための、詳細かつ適切で思慮に富んだ行動案を作成している ii. プロジェクトの進行過程を詳細かつ正確に計画し記録している iii. 非常に優れた自己管理スキルを示している

規準C：行動

最高点8

「コミュニティプロジェクト」において、生徒は以下のことができる。

- i. プロジェクトの成果として、「行動」としての奉仕活動を行う
- ii. 思考スキルを示す
- iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを示す

到達レベル	レベルの説明
0	生徒は、以下に記された基準に 達していない
1-2	生徒は： i. プロジェクトの成果として、「行動」としての奉仕活動を限定的に行っている ii. 思考スキルを限定的に示している iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを限定的に示している
3-4	生徒は： i. プロジェクトの成果として、「行動」としての奉仕活動をまずまずのレベルで行っている ii. 思考スキルをまずまずのレベルで示している iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルをまずまずのレベルで示している
5-6	生徒は： i. プロジェクトの成果として、「行動」としての奉仕活動を十分に行っている ii. 思考スキルを十分に示している iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを十分に示している
7-8	生徒は： i. プロジェクトの成果として、非常に優れた「行動」としての奉仕活動を行っている ii. 非常に優れた思考スキルを示している iii. 非常に優れたコミュニケーションスキルと社会的スキルを示している

規準D：振り返り

最高点8

「コミュニティプロジェクト」において、生徒は以下のことができる。

- i. 行動案に照らし合わせて、「行動」としての奉仕活動の質を評価する
- ii. プロジェクトの完了により、サービスマーケティングについての知識と理解がどのように深まったか振り返る
- iii. ATLスキルの発達を振り返る

到達レベル	レベルの説明
0	生徒は、以下に記された基準に 達していない
1-2	生徒は： i. 行動案に照らし合わせた「行動」としての奉仕活動の質を限定的に評価している ii. プロジェクトの完了により、サービスマーケティングについての知識と理解がどのように深まったかを限定的に振り返っている iii. ATLスキルの発達を限定的に振り返っている
3-4	生徒は： i. 行動案に照らし合わせて、「行動」としての奉仕活動の質をまずまずのレベルで評価している ii. プロジェクトの完了により、サービスマーケティングについての知識と理解がどのように深まったかをまずまずのレベルで振り返っている iii. ATLスキルの発達をまずまずのレベルで振り返っている
5-6	生徒は： i. 行動案に照らし合わせて、「行動」としての奉仕活動の質の評価を十分に行っている ii. プロジェクトの完了により、サービスマーケティングについての知識と理解がどのように深まったかを十分に振り返っている iii. ATLスキルの発達を十分に振り返っている
7-8	生徒は： i. 行動案に照らし合わせて、「行動」としての奉仕活動の質について優れた評価を行っている ii. プロジェクトの完了により、サービスマーケティングについての知識と理解がどのように深まったかについて非常に優れた振り返りを行っている iii. ATLスキルの発達について、詳細かつ正確な振り返りを行っている

パーソナルプロジェクトの目標

「パーソナルプロジェクト」の目標は、学習のために設定された特定の達成内容を表します。これらは、「パーソナルプロジェクト」を完了した結果として生徒が何を成し遂げられるかを定義します。

これらの目標は、本ガイドの「パーソナルプロジェクトの評価規準：第5年次」に記載された評価規準に直接関連しています。

A 調査

生徒は以下のことができる。

- i. 個人的な興味に基づき、プロジェクトの明確な目標と文脈を定義する
- ii. プロジェクトと関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認する
- iii. リサーチスキルを示す

B 計画

生徒は以下のことができる。

- i. 作品や成果の評価規準を定める
- ii. プロジェクトの進行過程を計画し記録する
- iii. 自己管理スキルを示す

C 行動

生徒は以下のことができる。

- i. 目標、文脈、評価規準に応じて、作品や成果を生み出す
- ii. 思考スキルを示す
- iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを示す

D 振り返り

生徒は以下のことができる。

- i. 自分の評価規準に照らし合わせて、作品や成果の質を評価する

- ii. プロジェクトの完了により、トピックやグローバルな文脈についての知識と理解がどのように深まったかを振り返る
- iii. プロジェクトを通しての I B の学習者としての成長を振り返る

パーソナルプロジェクトの調査と計画

「MYP パーソナルプロジェクト」は3つの要素で構成されます。

パーソナルプロジェクトの構成要素	評価方法
作品や成果につながるトピックに重点的に取り組むこと	発表やレポートで示される証拠
プロセスジャーナル（記録日誌）	レポートの付録として添えられた抜粋
レポート	4つの評価規準すべてを使ってレポートの内容を評価

表15

「パーソナルプロジェクト」の要素

「パーソナルプロジェクト」は生徒が個別に進めて完成させるものですが、グループ作業（劇の上演など）を取り入れることもできます。作品やプロジェクトの成果を協働して生み出す場合も、それぞれの生徒が学習の5つの段階を通してプロジェクトにどう関わり進行させたかが、はっきりとわかるようにしなければなりません。生徒一人ひとりがプロジェクトの異なる側面に責任をもつことができるグループプロジェクトも、貴重な体験となることがわかります。「パーソナルプロジェクト」は、常に生徒ごとに個別に評価が行われます。

生徒は、自分が興味をもった分野やトピックをもとに、プロジェクトの目標を決める必要があります。生徒にとって、ブレインストーミングでアイデアを出す機会や、他の生徒や学校外の友人、親族、教師などの人々とアイデアについて話し合う機会が役立ちます。プロジェクトの指導教員は、トピックの選択について指導やアドバイスを行う必要があります。その場合は、支援が客観性を欠くことのないようバランスを保ち、決して生徒の代わりにプロジェクトを決めてはいけません。プロジェクトの当事者は常に生徒でなくてはなりません。

生徒は、自分の考えやリサーチのプロセス、最初のアイデアからの改良や発展を記録します。そして、自分が達成したい目標の概要を固めていきます。これは多くの場合、生徒と指導教員の最初のミーティングの基礎となります。

生徒が立てる目標は、実現可能であると同時に、生徒の知識やスキル、技術を適切な方法で試すものであるべきです。使える時間やリソースに基づいた、達成可能な目標である必要があります。複雑すぎる手順を必要とするプロジェクトや、学習のプロセスが長くなり

すぎるプロジェクトの提案が出るかもしれません。簡単すぎたり、取り組む課題が少なすぎるプロジェクトもあり得ます。生徒にとって現実的なプロジェクトかどうかの判断は、生徒と指導教員との話し合いによって決められます。

生徒がもっている興味や知識とともに、その生徒の長所や弱点も考慮される必要があります。プロジェクトの一環として他の人々との協働作業も行いますが、プロジェクトは生徒自身のものでなければなりません。生徒は、他の人々からの助けのみに頼ることなく、プロジェクトを完成させる力が必要です。教師やその他の適切な大人がリソースとして関与することがあっても、生徒は必ず1人でプロジェクトを完成させなければなりません。

表16は、チャレンジに満ちた、または高度なチャレンジに満ちた「パーソナルプロジェクト」の例です。

チャレンジに満ちた目標	高度なチャレンジに満ちた目標
写真についての技術を独学し、それを記録する。	自分の住む地域や住人を写真に撮り、展覧会を開く。
リサイクル素材を使って長く使えるバッグを製作する。	リサイクル素材を使ってさまざまなバッグを作り、地域のアートセンターで展覧会を開く。
興味のあるトピックについて記事を書き、多くの人に読んでもらえるよう各種刊行物（学内誌、教育関係誌、専門雑誌）に投稿する。	興味のあるトピックについて、本1冊分の長さのオリジナル作品を執筆し出版する。

表16

チャレンジに満ちた／高度なチャレンジに満ちた「パーソナルプロジェクト」

プロジェクトのグローバルな文脈を定める

生徒が選んだグローバルな文脈は、プロジェクトに探究や研究のための文脈を与えます。生徒は、グローバルな文脈をひとつだけ選んで目標を決めます。その他のグローバルな文脈からも、プロジェクトに関する情報や新しい視点を得ることは多いでしょう。しかし、1つの文脈に重点的に取り組むことで、（自らに課した）制約から機会が生まれ、プロジェクトの焦点が定まります。

表17は、「MY P パーソナルプロジェクト」におけるグローバルな文脈の使用例を示しています。

グローバルな文脈	パーソナルプロジェクトの例
アイデンティティと関係性 次のことを探究する。アイデンティティ／信念と価値観／個人的、身体的、心的、社会的、精神的健康／家族、友人、コミュニティ、文化などの人間関係／人間らしさの意味	・ ソーシャルネットワーキングの2つの側面／デジタル市民権とインターネットでのいじめに関する啓発活動 ・ オンライン空間のアイデンティティが現実の人間関係に及ぼす影響 — 研究小論文 ・ 伝統料理の継承／家庭に伝わる、歴史的関連性のあるレシピを撮影したビデオシリーズ ・ マスメディアが10代のアイデンティティにもたらす効果 — ショートフィルム
空間的・時間的位置づけ 次のことを探究する。個人史／自分の家と旅路／人類の転換期／発見／人類による未踏の地への探検と移住／個人、地域、グローバルの視点から見た、個人と文明の関係と相互関連性	・ ユークリッド空間の宇宙観 — 3Dモデル ・ 新世界を探し求める探検家 — 移住史のビジュアルテキスト ・ メイフラワー号と宗教的自由の夢 — 家族の歴史 ・ 公文書と彫像で示す家系図
個人的表現と文化的表現 次のことを探究する。私たちが考え、感情、気質、文化、信念、価値観を理解し、それを表現する方法／自らの創造性を振り返り、展開し、楽しむ方法／美に対する理解	・ 文化の表現形式としてのビデオゲーム／現代の文化を表現していることがわかる5つのゲームを取り上げたショートフィルム ・ 日本文化におけるマンガの芸術性／日本のアニメと、友人たちの理解に関する調査 ・ 地域のコミュニティアートセンターでのダンスを通じた文化と自己表現 — ダンス公演
科学技術の革新 次のことを探究する。自然界とその法則／人間と自然が相互に与える影響／人間が理解する科学原理の利用法／科学とテクノロジーの発展がコミュニティや環境に及ぼす影響／環境が人間の行動に及ぼす影響／人間のニーズに合わせた環境の利用法	・ ナノファイバーでつくる強度の高い自転車 — ナノファイバーを使った自転車の試作品 ・ 反物質とはどんな物質？ — 情報提供の講演 ・ 遺伝学とゲノミクスが私たちの健康に重要なわけは？ — メディアを使った発表 ・ 幹細胞は臓器移植に取って代わるだろうか — 調査レポート

グローバルな文脈	パーソナルプロジェクトの例
グローバル化と持続可能性 次のことを探究する。人工のシステムとコミュニティの相互関連性／地域のプロセスとグローバルなプロセスの関係／地域の体験をグローバルな体験へつなげる方法／世界の相互関連性がもたらす機会と緊張／意思決定が人類や環境に及ぼす影響	・ 発展途上国における水不足 — 意識向上キャンペーン ・ 欧州と欧州経済共同体における財政危機が米国に与える影響 — ビジュアルプレゼンテーション ・ ペルーの未来を変えるツールとしての教育 — 大人のためのワークショップ ・ 熱帯雨林の保護について発展途上国が担う役割 — スライドによる発表
公正性と発展 次のことを研究する。権利と義務／コミュニティ間の関係／限りある資源の、他人や他の生物との共有／機会均等を手に入れる権利／平和と紛争解決	・ フェアトレードの支援：ガーナのカカオ産業 — 学校の食堂や売店に向けたフェアトレード奨励の意識向上キャンペーン ・ 自由市場経済と、フェアトレードにおけるその役割 — 生徒に向けた講演 ・ 人種の交わりと不平等を探る — ラジオ放送 ・ 難民申請者と、彼らの生きる権利 — 絵画作品

表17
グローバルな文脈とMYPプロジェクト

グローバルな文脈は、生徒が探究のサイクルに取り組み、学問的な知識から示唆に富んだ信念のある行動へと移ることを助けます。

作品や成果の評価規準を決める

目標の一貫として、生徒は自分のプロジェクトが最終的にどのような作品や成果になるかを決めなければなりません。作品や成果の例として、アート作品、模型、ビジネスプラン、キャンペーン、建築の設計図や意匠図、小論文、研究、討論、映像などの形式が考えられます。

生徒は、自分のプロジェクトの最終的な成果や作品の質をはかる現実的な評価規準を決める必要があります。担当の指導教員と協力して、高品質な作品や成果を生み出すには何が必要かを決めます。評価基準の設定や質の評価に適したツールには、チェックリストやルーブリック（評価指標）などがあります。生徒は評価規準をプロセスジャーナルに記録し、最終的な成果や作品の評価に使います。

例えば、ハーフマラソンへの出場を目指した個人的なフィットネスプログラムの計画を目標にするとします。プロジェクトのねらいは、トレーニング計画に従って体力向上をはかり、ハーフマラソンを完走することで向上した体力という成果を示すことになります。

この場合、仮のランニングタイムを適用したランニングのスケジュール案や、ハーフマラソンの本番で達成したい最終的な完走タイムなどが、評価規準に含まれるでしょう。成果は、フィットネスチャート、日記の内容、ランニングタイム、実際のハーフマラソンで撮影した一連の写真などの形で記録できます。

通常、生徒は目標についてしばらくリサーチをしてからでないと評価規準を決めることはできないでしょう。自分が達成したいことや、プロジェクトの作品や成果の案についてはっきりと理解した時点で、初めて規準が決まるはずです。

パーソナルプロジェクトのレポート作成

「レポート」とは、観察したこと、聞いたこと、行ったこと、調査したことの、口頭や文字による説明です。レポートは、できる限り明確かつ簡潔に情報を伝えることを目指します。「MYP パーソナルプロジェクト」のレポートは、プロセスジャーナルに記録された経験やスキルを要約して、生徒が「パーソナルプロジェクト」にどう取り組んだかを示します。

レポートは、MYP プロジェクトが掲げる「調査」、「計画」、「行動」、「振り返り」の目標に従って、これらの目標別の項目で作成します。レポートは、評価規準のすべての要素に対する証拠を含むものでなければなりません。

「パーソナルプロジェクト」で作成するレポートの形式は、利用できるリソースや生徒のもつ興味により異なります。生徒は、学習の好みや自分の長所、利用できるリソースを考慮して、最も適したレポートの形式を決めます。レポートの要素を明確に示し、最上位レベルの評価規準に達するには、わかりやすく簡潔に伝える能力が欠かせません。担当する指導教員は、レポートの形式について指導する責任があります。

「MYP パーソナルプロジェクト」のレポートとしては、主に文書、電子メディア、音声、映像の4つの形式が考えられます。

形式	長さ		
	英語、フランス語、スペイン語、アラビア語	中国語	日本語
文書	1500～3500語	1800～4200字	3000～7000字
電子メディア（ウェブサイト、ブログ、スライドショー）	1500～3500語	1800～4200字	3000～7000字
音声（ポッドキャスト、ラジオ放送、録音）	13～15分	13～15分	13～15分
映像（映画）	13～15分	13～15分	13～15分

表18

「パーソナルプロジェクト」のレポート形式

生徒が上記以外の言語でレポートを作成する場合、学校は必ずその言語にとって適切な制限語数（字数）を伝えます。

レポートは、どれほど創造的にまとめられていたとしても、「パーソナルプロジェクト」の作品や成果の代わりにはなりません。「パーソナルプロジェクト」の作品や成果が論文や小説などの文書形式である場合は、プロジェクトのレポートとは異なるものと見なされます。

文書形式のレポートは、「パーソナルプロジェクト」の過程についてわかりやすく簡潔な形で説明することを目標とし、通常は複数の段落に小見出しを付けた構成で作成されます。生徒は、レポートが評価規準を満たし、上に挙げた構成に従っていることを必ず確認します。

音声形式のレポートは、ポッドキャスト、インタビュー、ラジオ放送など、さまざまな形式で作成できます。口頭形式のレポートは、校内での標準化や、モデレーション（評価の適正化）のため I B に提出する場合に備えて、必ず録音します。口頭で発表を行う生徒は、メモやキューカード（内容の要点などを書きこんだカード）、説明図などを使うことができます。レポートのすべての要素が評価規準に見合うよう、注意を払う必要があります。また学校と生徒は、レポートの形式が受け手となる人々に対して有効であるかどうかを判断する必要があります。

映像形式のレポートの大半は、プロセスジャーナルの内容が示す「パーソナルプロジェクト」の重要な場面をまとめたショートフィルムです。ショートフィルムは、生徒が「パーソナルプロジェクト」を行う上で成し遂げたことがわかる構成でなければなりません。撮影や編集作業の計画と時間の割り当てを、初めから考慮に入れる必要があります。

電子形式のレポートは、ウェブサイト、ブログ、プレジ、パワーポイント、またはその他の形式のスライドショープレゼンテーションなど、さまざまな形式で作成できます。他のすべての形式と同じく、電子形式のレポートでも、生徒は必ず評価規準を満たし、「パーソナルプロジェクト」への取り組みを効果的に示すものでなければなりません。

文書形式と音声や映像形式の両方から成るマルチメディア形式のレポートを提出する場合は、表19に示した文書の語数（字数）と音声や映像の発表時間の組み合わせに従います。

時間（音声または音声つき映像記録）		文字数
3分	および	1200～2800語 2688～3360字 2400～5600字（日本語）
6分	および	900～2100語 2016～2520字 1800～4200字（日本語）
9分	および	600～1400語 1344～1680字 1200～2800字（日本語）
12分	および	300～700語 672～840字 600～1400字（日本語）

表19

マルチメディア形式レポートの長さ要件

音声、映像、マルチメディア形式のレポートは、校内での標準化や、モデレーション（評価の適正化）用に提出する場合に備えて、必ず録音または録画すること。指導教員は、録音または録画の品質が I B への提出に適したものになるよう必ず確認すること。

レポートは「MY P パーソナルプロジェクト」を構成する要素であるため、生徒は時間の配分を慎重に計画すべきです。計画、下書き、リハーサル、資料の準備は、すべて欠かせないステップです。レポートを完成させるために必要な時間も考慮する必要があります。生徒は、自分のレポートが、プロセスジャーナルの抜粋ではなく、「MY P パーソナルプロジェクト」を構成する独立した要素となっていることを必ず確認しなければなりません。

「パーソナルプロジェクト」にグループ作業が含まれる場合は、それぞれの生徒が、「パーソナルプロジェクト」のすべての段階で自分がどのような貢献をしたかを明確に示すレポートを作成しなければなりません。さらに、生徒は自分専用のプロセスジャーナルをつける必要があります。

評価のためのレポートを提出する際は、必ず次を含めること。

- ・ パーソナルプロジェクトのカバーシート
- ・ 記入済みの学問的誠実性宣誓書
- ・ プロセスジャーナルの抜粋
- ・ 発表で使用する視覚資料（該当する場合）
- ・ 参考文献一覧や情報源

その他のアドバイス： T S M に掲載された口頭によるレポートの例を参照してください。

評価規準の使用

「MYP パーソナルプロジェクト」は、配点比率の等しい4つの評価規準に準拠した「絶対評価」を採用しています。

規準A	調査	最高点 8
規準B	計画	最高点 8
規準C	行動	最高点 8
規準D	振り返り	最高点 8

「MYP パーソナルプロジェクト」では、4つの評価規準**すべて**において、**すべての要素を必ず**評価すること。

MYPでは、目標が評価規準に対応します。各規準には8つの到達レベル（1～8）があり、基本的に「限定的」（1～2）、「まずまず」（3～4）、「十分」（5～6）、「非常に優れている」（7～8）の4つの規準に分けられます。それぞれの規準には「レベルの説明」があり、教師はこれを使って、生徒の成長と達成に最も適合するレベルを選びます。

本ガイドは、MYPの第5年次で行う「パーソナルプロジェクト」に**必要な評価規準**を掲載しています。学校は、必ず本ガイドに掲載されたとおりの適切な評価規準を使って、プログラムにおける生徒の最終的な成果を報告しなければなりません。

コーディネーターと指導教員は、評価規準に直接言及して、「MYP パーソナルプロジェクト」に期待されることを明らかにします。評価課題ごとの説明では、生徒が何を知り、どう行動することが期待されているかを明確にする必要があります。その場合、次のような形式を用いることができます。

- ・ 直接の、またはインターネットなどを通じた対話
- ・ 説明会
- ・ 学校のイントラネットに作られた、詳しいアドバイスのページ

パーソナルプロジェクトの評価規準：第5年次

規準 A：調査

最高点 8

「パーソナルプロジェクト」において、生徒は以下のことができる。

- ・ 個人的な興味に基づき、プロジェクトの明確な目標とグローバルな文脈を定義する
- ・ プロジェクトと関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認する
- ・ リサーチスキルを示す

到達レベル	レベルの説明
0	生徒は、以下に記された基準に 達していない
1-2	生徒は： - 個人的な興味に基づき、プロジェクトの目標と文脈を設定しているが、掘り下げや到達しやすさが限定的である - 既習事項と科目固有の知識を確認しているが、事例や関連性が限定的である - リサーチスキルを限定的に示している
3-4	生徒は： - 個人的な興味に基づき、プロジェクトの基本的かつ適切な目標とグローバルな文脈を述べている - プロジェクトの一部と関連性のある、基本的な既習事項と科目固有の知識を確認している - リサーチスキルをまずまずのレベルで示している
5-6	生徒は： - 個人的な興味に基づき、明確でチャレンジに満ちたプロジェクトの目標と文脈を定義している - プロジェクトの大部分と関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認している - リサーチスキルを十分に示している
7-8	生徒は： - 個人的な興味に基づき、明確で高度なチャレンジに満ちたプロジェクトの目標と文脈を定義している - プロジェクト全体にわたり大いに関連性のある既習事項と科目固有の知識を確認している 非常に優れたリサーチスキルを示している

規準B：計画

最高点8

「パーソナルプロジェクト」において、生徒は以下のことができる。

- i. 作品や成果の評価規準を定める
- ii. プロジェクトの進行過程を計画し記録する
- iii. 自己管理スキルを示す

到達レベル	レベルの説明
0	生徒は、以下に記された基準に 達していない
1-2	生徒は： i. 作品や成果の評価規準を限定的に定めている ii. プロジェクトの進行過程の計画や記録が限定的、または不完全である iii. 自己管理スキルを限定的に示している
3-4	生徒は： i. 作品や成果の評価規準をまずまずのレベルで定めている ii. プロジェクトの進行過程をまずまずのレベルで計画し記録している iii. 自己管理スキルをまずまずのレベルで示している
5-6	生徒は： i. 作品や成果の評価規準を適切かつ十分に定めている ii. プロジェクトの進行過程を十分に計画し記録している iii. 自己管理スキルを十分に示している
7-8	生徒は： i. 作品や成果の評価規準を綿密に定めている ii. プロジェクトの進行過程を詳細かつ正確に計画し記録している iii. 非常に優れた自己管理スキルを示している

規準C：行動

最高点8

「パーソナルプロジェクト」において、生徒は以下のことができる。

- i. 目標、グローバルな文脈、評価規準に応じて、作品や成果を生み出す
- ii. 思考スキルを示す
- iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを示す

到達レベル	レベルの説明
0	生徒は、以下に記された基準に 達していない
1-2	生徒は： i. 目標、グローバルな文脈、評価規準に応じた作品や成果を限定的に生み出している ii. 思考スキルを限定的に示している iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを限定的に示している
3-4	生徒は： i. 目標、グローバルな文脈、評価規準に応じて、一定の作品や成果を生み出している ii. 思考スキルをまずまずのレベルで示している iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルをまずまずのレベルで示している
5-6	生徒は： i. 目標、グローバルな文脈、評価規準に応じて、十分な作品や成果を生み出している ii. 思考スキルを十分に示している iii. コミュニケーションスキルと社会的スキルを十分に示している
7-8	生徒は： i. 目標、グローバルな文脈、評価規準に応じて、非常に優れた作品や成果を生み出している ii. 非常に優れた思考スキルを示している iii. 非常に優れたコミュニケーションスキルと社会的スキルを示している

規準D：振り返り

最高点8

「パーソナルプロジェクト」において、生徒は以下のことができる。

- i. 自分の評価規準に照らし合わせて、作品や成果の質を評価する
- ii. プロジェクトの完了により、トピックやグローバルな文脈についての知識と理解がどのように深まったかを振り返る
- iii. プロジェクトを通してのIBの学習者としての成長を振り返る

到達レベル	レベルの説明
0	生徒は、以下に記された基準に 達していない
1-2	生徒は： i. 自分の評価規準に照らし合わせて、作品や成果の質の評価を限定的に行っている ii. プロジェクトの完了により、トピックやグローバルな文脈についての知識と理解がどのように深まったかを限定的に振り返っている iii. プロジェクトを通してのIBの学習者としての成長を限定的に振り返っている
3-4	生徒は： i. 自分の評価規準に照らし合わせて、作品や成果の質の基本的な評価を行っている ii. プロジェクトの完了により、トピックやグローバルな文脈についての知識と理解がどのように深まったかをまずまずのレベルで振り返っている iii. プロジェクトを通してのIBの学習者としての成長をまずまずのレベルで振り返っている
5-6	生徒は： i. 自分の評価規準に照らし合わせて、作品や成果の質を十分に評価している ii. プロジェクトの完了により、トピックやグローバルな文脈についての知識と理解がどのように深まったかを十分に振り返っている iii. プロジェクトを通してのIBの学習者としての成長を十分に振り返っている
7-8	生徒は： i. 自分の評価規準に照らし合わせて、作品や成果の質に非常に優れた評価を行っている ii. プロジェクトの完了により、トピックやグローバルな文脈についての知識と理解がどのように深まったかについて、非常に優れた振り返りを行っている iii. プロジェクトを通してのIBの学習者としての成長について、非常に優れた振り返りを行っている

パーソナルプロジェクトのモデレーション

MYP を第 5 年次で修了するすべての学校には、「パーソナルプロジェクト」の成績に対する正式な検証が義務づけられ、教師による校内での標準化に対する外部モデレーション（評価の適正化）のプロセスが求められる。

「モデレーション」とは、評価を確認し標準化することです。モデレーションを行ったあとに成績の調整が必要になるかどうかは、指導教員の見解や、「MYP パーソナルプロジェクト」の評価規準がどのように適用されていたかによって決まります。

外部モデレーション（評価の適正化）は、IB 資料（英語版）『*Guide to MYP eAssessment*（MYP eアセスメントガイド）』に記載された評価規準が、一貫して正確に適用されていることを保証します。

MY Pプロジェクトの学問的誠実性宣誓書

MY Pコミュニティプロジェクト／ MY Pパーソナルプロジェクト

(該当しない方を取り消し線で消してください)

生徒氏名										
学籍番号										
学校名										
学校番号										
指導教員										
生徒：このフォームには、プロジェクトの進行状況と、あなたが指導教員と話し合った内容を記録してください。指導教員とのミーティングは、少なくとも3回は行いましょう。まず、プロジェクトの初めにあなたの最初のアイデアを話し合うとき、次にプロジェクトを肝心な部分まで進めたとき、最後にレポートの提出や発表が終わったときです。 指導教員：生徒への指導監督セッションは、プロジェクトの初め、中間ミーティング、最終ミーティングの、少なくとも3回は行ってください。それ以外にミーティングをしても構いませんが、このフォームに記入する必要はありません。ミーティングごとに、生徒は話し合いの内容をまとめ、指導教員は日付と共に署名をしてください。										
	日付	話し合いの主な内容	署名と日付							
ミーティング1			生徒： 指導教員：							
ミーティング2			生徒： 指導教員：							

ミーティング3			生徒： 指導教員：
指導教員のコメント 			
生徒の宣誓 この学習成果物は私が制作したものであり、これが最終版です。成果物の中で使用した他人のことば、作品、アイデアは、文章、音声、映像（印刷物や電子媒体）にかかわらず、すべて引用の出典を学習成果物の中で明らかにしました。 指導教員の宣誓 提出した学習成果物は、私が知り得る限り、生徒自身が制作したものであることを認めます。			
生徒の署名			日付
指導教員の署名			日付

MY P パーソナルプロジェクトのカバーシート

パーソナルプロジェクト

生徒氏名										
学籍番号										
学校名										
学校番号										
指導教員										

プロジェクトの題名：

プロジェクトの目標：

長さ（字数／発表時間）：

プロジェクトの提出物

- 記入済みの学問的誠実性宣誓書 ☐
- プロセスジャーナルの抜粋 ☐
- 発表で使用する視覚資料（該当する場合） ☐
- 参考文献目録／情報源 ☐

MYPプロジェクトの用語

用語の解説

用語	意味
参考文献目録	プロジェクトの調査研究に利用したすべての情報源をアルファベットまたは五十音順に記載したリスト
規準	「パーソナルプロジェクト」の作品や成果が、生徒が定義したとおりに質の高い結果を出すため満たさなければならない特定の要素
引用文献リスト	プロジェクトの発表またはレポートに引用された文献のみを、アルファベットまたは五十音順にまとめたリスト
成果	「パーソナルプロジェクト」の最終結果を表す用語で、例えば意識向上キャンペーンのように、プロジェクトの結果が無形である場合や、多様な側面をもつ場合に使用する。
プロセスジャーナル (記録日誌)	生徒が「MYPプロジェクト」を行いながら書き留める記録を指す一般的な用語
作品	「パーソナルプロジェクト」の最終結果を表す用語で、プロジェクトの結果が彫刻、映画、物語、模型などの有形の物体となる場合に使われる。
レポート	観察したこと、聞いたこと、行ったこと、調査したことを、できる限りわかりやすく簡潔に伝えることを目的とした、口頭や文章による説明

MYPプロジェクトの指示用語

指示用語

用語	意味
つくりなさい (Create)	自分の考えや想像を、作品や発明として考案する。
定義しなさい (Define)	言葉やフレーズ、概念、物理量に正確な意味を与える。
論証しなさい (Demonstrate)	実例や実際の応用例を示して理由と論拠を提示する、証拠立てる、あるいは説明することによって明確にする。
発展させなさい (Develop)	細部にわたって徐々に改善する、精巧に作る、あるいは拡張する。より進んだ、あるいはより効果的な状態へと進化させる。
定式化しなさい (Formulate)	関連する概念や議論を正確に、そして体系的に表現する。
特定しなさい (Identify)	多くの可能性から1つの答えを提示する。際立った事実や特徴を認識し、簡潔に述べる。
正当化しなさい (Justify)	ある答えや結論を裏づけるために妥当な理由や証拠を提示する。
簡単に述べなさい (Outline)	短い説明や要約を提示する。
提示しなさい (Present)	展示や観察、調査または検討のために示す。
述べなさい (State)	特定の名称や値、その他の簡潔な答えを説明や計算を伴わずに挙げる。

参考文献

- Anderson, L and Krathwohl, D. 2001. *Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessment: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objectives*. New York, USA. David McKay Company, Inc.
- Anstey, M and Bull, G. 2006. *Teaching and Learning Multiliteracies: Changing Times, Changing Literacies*. Kensington Gardens, South Australia. Australian Literacy Educators' Association.
- Badke, W. March 2009. "Stepping Beyond Wikipedia". *Educational Leadership*. Vol 66, number 6. Pp 54-58.
- Beetlestone, F. 1998. *Creative children, imaginative teaching*. Oxford, UK. Oxford University Press.
- Costa, A. 2001. *Developing Minds: A resource book for teaching thinking*. Virginia, USA. Association for Supervision and Curriculum Development.
- Cottrell, S. 2008. *The study skills handbook*. Hampshire, UK. Palgrave Macmillan.
- Dykes, M. August 2005. Dawson D. August 2009 (revised). *How to evaluate information sources*. University of Saskatchewan, Canada. <http://library.usask.ca/howto/evaluate.php>.
- Fisher, R. 1995. *Teaching children to learn*. Cheltenham, UK. Nelson Thornes Ltd.
- Freestone, M. 2007. *Thinking for Understanding: A Practical Resource for Teaching and Learning and Curriculum Development*. Tasmania. DesignShare Inc.
- Hayes Jacobs, H. 2010. *Curriculum 21: Essential Education for a Changing World*. Virginia, USA. Association for Supervision and Curriculum Development.
- Herman, JL, Aschbacher, PR and Winters, L. 1992. *A Practical Guide to Alternative Assessment*. Virginia, USA. Association for Supervision and Curriculum Development.
- Kaye, C. 2010. *The complete guide to service learning*. Minneapolis, USA. Free Spirit Publishing.
- Kaye, C, 2012. *Strategies for success with 21st century skills and literacy*. Los Angeles, USA. ABCD Books.
- Marzano, R, Pickering, D and McTighe, J. 1993. *Assessing Student Outcomes. Performance Assessment Using the Dimensions of Learning Model*. Virginia, USA. Association for Supervision and Curriculum Development.
- Ohler, J. March 2009. "Orchestrating the media collage". *Educational Leadership*. Vol 66, number 6. Pp 9-13.
- Richardson, W. 2009. *Blogs, Wikis, Podcasts, and Other Powerful Web Tools for Classrooms*. Second edition. Thousand Oaks, CA, USA. Corwin Press.

- Sternberg, W and Williams, W. 1996. *How to develop student creativity*. Virginia, USA. Association for Supervision and Curriculum Development.
- Thoman, E and Jolls, T. 2001. Jolls, T. 2003 (deconstruction only). *Literacy for the 21st Century: An Overview and Orientation Guide To Media Literacy Education*. Center for Media Literacy. http://www.medialit.org/sites/default/files/01_MLKOrientaion.pdf
- Tokuhamma-Espinosa, T. 2009. *The New Science of Teaching and Learning: Using the Best of Mind, Brain, and Education Science in the Classroom*. New York, USA. Teachers' College Press.
- Wolf, Sara. 2010. "Information Literacy and Self Regulation: A Convergence of Disciplines". *School Library Media Research*. American Library Association. Vol 10. http://www.ala.org/aasl/aaslpubsandjournals/slmrb/slmrcontents/volume10/wolf_informationliteracy.